45—525

高橋五郎著

蓮論

東京 文榮閣藏版

明治
38 3 11
内交

日蓮論

序

日蓮は三國の高僧祖師中に在て最も新らしく、而して又最も異彩を發てる者の一なり、殊に其出る最も晩かりしを以て從來の諸宗を悉く併呑し或は壞滅せんと計りし志望は、直ちに天地と其濶大を同じうす、百世の下尙懦夫を感奮せしむるに足れり、

今の自稱預言者等は、野に呼はる人の聲として一世を警動する能はず、却つて一世の笑殺する所とならんとす、斯の如き薄志弱行焉んぞ能く天下を革新せんや、

本論に粗説ける如く余輩は日蓮を研究すべき必要を今日に認むるや大なり、聊か其の皮相を論じて大方の君子に質すと云爾

明治卅八年三月

高橋五郎識

日蓮論

目次

第一章　日蓮の今日に想起せらるゝ所以……一頁
第二章　日蓮が大誓願を立たる精神何如……一三
第三章　日蓮とジョセフ、スミス及び親鸞……三一
第四章　深密傳とスポールヂング譚……五五
第五章　宗教家としての日蓮……七九
第六章　妖術と奇蹟——日蓮と伴天連……一〇一
第七章　四箇格言と諸他の佛宗……一二五
第八章　政治家としての日蓮……一五八

第九章　問題承前……元寇と日蓮……一六七
第十章　箇人としての日蓮……一五九
第十一章　日蓮宗の教義……二二三
第十二章　日蓮宗の現況及生命……二三五

日蓮論

高橋五郎著

第一章　日蓮の今日に想起せらるゝ所以

夫れ身死して其名また湮滅し了るは概して小人の事のみ、英雄豪傑偉人巨匠は、五體土に歸るも、芳名は不朽に垂れ、其感化力は千歳の下能く懦夫をして奮ひ起たしめんとす、是れ社會的に長生久視する也、此の意味に於てや、英傑の靈魂は全たく不滅なる者にして、如何なる唯物論者と雖も、之を否定すること能はざる可し、天下の歴史は英雄豪傑の傳記の

みとは先輩すでに之を道破したり、嗚呼盛なる乎哉、

我が日蓮大士の如きも、勿論一大疑問物なりとは雖ども、其亦一豪傑なりしことは善く想見せらるゝが如し、

カーライル曰く、萬邦の英雄豪傑たる、其形狀千差萬別なりと雖ども、其材質に至りては全く全一にして、皆金なる而已と、是を以て英雄と英雄とは屢ば互に相類するあり、ハンニバルはナポレオンを想起せしめ、ナポレオンは孫子を想起せしむ、其他ソクラテスの孔子に於ける、孔明の楠に於ける、皆然らざるは無し、此の如く日蓮の想起せらるゝ亦甚だ頻繁たる者あり、例へば西洋紀元六百二十二年亞拉毘亞に回々教を創開したるマホメットの生涯を一瞥するや、幾分か日蓮を想起する所あり、救世軍の統領ブース(Booth)の行動を一讀するや、亦是れ日蓮を想起する所あり、否な是よりも更に幾層著明なる者は二三年前に於ける麼兒門教の渡來にぞある、

麼兒門教宣教師の一たび横濱に上陸するや、一婦多妻的畜生教は來れりとて、内外人とも之を排擊すること不俱戴天の仇敵の如く、之を疾視厭惡ずること蛇蠍の如くなりしが、該教を研究したる識者は竊かに之が創立者(ジョセフスミス)を日蓮に比せり、余輩も亦嘗て一書を著はして、其彼此形迹に於て相似たる者あるを云々したり、其類似たるや種々なりと雖も、―又余輩は之を後章に於て特に論ぜんと欲すと雖も、今聊か余輩が嘗て說き及ぼしたりし所を摘錄すれば、大凡左の如し、先づ余輩は麼兒門經といふ該教の經典の由來を佛

教の華嚴經の由來と比較し、更に一歩を進めて曰く、

『否、眞言宗の起源に至りては、尚更に是に近き者あり、傳へ云ふ、弘法大師尚空海と稱せる時佛前に誓て曰く、從來の佛典は我が心に疑ありて決せず、只願くは三世十方の諸佛我に正法を示したまへと、而して暫く眠るや尊げなる僧枕頭に立ちて告げたまはく、茲に大經卷あり、大毘盧遮那神變加持と名く、是れ眞箇の大秘密經なりと、遂に大和國高市郡久米寺の塔下よりして此經を堀り出せりと、更に溯りて之を稽ふるに、眞言宗の秘經たる大日經等は、其初佛滅後六七百年の交、龍猛菩薩南天笠に行きて、芥子七粒を加持し以て鐵塔の扉を打破り、金剛薩埵に遇ひて授かり來りし者なり、而て該宗にては釋迦の代りに大日如來(毗盧遮那)を以て教主と爲す、是れ豈ジョセフ、スミスが天使モロナイに導びかれて金版の古典を發堀したるとの其揆を一にする者に非ずや、然るに一は佛教中の至深至遂なる理智冥合の秘教秘典と尊信せられ、一は基督教中の杜撰孟浪なる異端邪說と排斥せらる、其幸不幸相距る何んぞ遠きや、其遇不遇相異る奚ぞ大いなるや、其讃毀の霄壤なる嗟人類も亦先入の兒、僻見の女なる哉、

余輩は既にモルモン教の起原を以て華嚴宗と眞言宗の起原に比較したり、更に進んでジョセフ、スミスを日蓮に比較し見んか、熟ら按ずるにジョセフ、スミスが一千八百二三十年に起りて、敢然餘宗の無眞理を唱破したるは、正に是れ日蓮法師が建長五年卅四月廿八日朝日に向ひて始

めて南無妙法蓮華經と唱へ、頓て大膽にも雲霞の如き十一宗徒が面前に毅然として、例の四箇格言を吐露し、諸宗の無得道を叫破したると均しく、氣焔眞に萬丈、東西處を異にし、古今時を別つと雖も、其の精神氣概妙に符節を合すと謂ふべし、』

山川善太郎氏亦佛敎を大いに研究したりと稱す、頃日邂逅して談偶ま麼兒門敎に及ぶや、山川氏其意見を吐露して曰く、ジョセフ、スミスは酷だ日蓮に似たり、殊に其現世を輕んぜざる所に於て俱に符節を合するは奇と謂はざる可らず、と、眞に然り、誠に具眼者の語と稱す可し、

ジョセフ、スミスは勿論近世の人なりしかども、日蓮の如きは五百年の昔に出ながらも、甚だ近世風にして、勿論法華經の善巧方便を極用したるならんと雖ども、現今の『運動』または『政略』を餘りに善く逆知したる者に似たり、

但し麼兒門敎の渡來を見て日蓮を回憶するは啻に是に止まらず、如何となれば余輩は又該敎の歷史と法華宗の歷史との間に頗る似たる者あるを以て也、啻に兩つながら世人の迫害を蒙むれる而已ならず、彼に『スポールヂング譚』あれば（麼兒門敎論百五十四頁を見よ）、我には『日蓮深密傳』（後章を見よ）あり、前者は五十の星霜を僅かに經たる而已なれば、讒誣の熾んなるは敢て怪しむに足らざれども、後者は五百年の今日尙僅々數十頁の一奇書を駁倒し得ざる趣あり、否な啻に駁倒し得ざる而已ならず、却つて明治の天地に該書の橫行するを見るが如し、俱に其道の興廢浮沈に關すと信せらる、東西兩箇の最新

宗教其相酷似する何ぞ其れ大なる乎、

寔に麼兒門教と日蓮宗とは共に宗教の最も新らしき者なり、而して其創立者の云爲と其宗教の歷史とは酷だ相似たり、而して又俱に――其宗教若くは宗派が兎に角世に廣く行なはるゝに至れるだけは――頗る成功したる者と謂はざる可らず、是に於てか余輩は又更に一つ今日に日蓮を想ひ起す機緣に際會す、

余輩他處に既に論及したりし如く（拙著一元哲學及び最近著宇宙觀の序を看よ）、今日に於ては既行の各宗教悉く沈睡に傾むける樣子ありて、一見救世の事業覺束なきが如くなればとて、或る方面には頻りに新宗教興起の必要を叫ぶ者あるのみならず、又世上あちらこちら既に預言者又は大覺者として旗旆を翻がへし、

信徒を誘ひ作るに汲々たる人々無きに非ず、然れども悲い哉未だ一人も大衆の信仰を博し得たる者なきが如し、此の失敗たるや、或は眞正の敎主たるべき英傑未だ出でざるが爲に、其唱ふる宗敎の傳播甚だ遲々として、愚夫愚婦にだも餘り尊信せられざるならんも知る可らずと雖ども、又其所謂る新宗敎を天下に宣布する方法に於て遲鈍なる處あるに幾分は因らずんばあらず、豈單に熱心薄しと謂はんや、豈單に決心弱しと謂はんや、豈單に學識乏しと謂はんや、豈單に修行足らずと謂はんや、其不成功は蓋し新機軸を出して一世を驚倒する能はざるに職として維由る者ならずとせんや、換言せば、今日の所謂る『預言者』等が多くは龍頭蛇尾にして、竟に世の嘲笑に打勝ち得ず、動もすれば譏謗聲裏に葬

むられ了らんとすると、全たく天才の缺けたるに起因する也、ミルトン、ダンテが萬世不朽の長詩を賦し得たるは天才なり、ナポレオン、アレキサンデルが天下を席巻するの譽を得たるも天才なり、凡て天才(genius)なき人は何等の大事業を成し就ぐる能はじ、秀吉家康兩公の天才は各々政界に覇權を握れり、傳教弘法兩大師の天才は各々教界に雄飛するに至りぬ、ジョセフ、スミス然り、日蓮大士然り、寔に非凡の天才は日蓮をして四面皆楚歌なる中に在て、遂に聾鼓鼕鼕群敵を鳴潰し、早くも轟然凱歌を奏せしめたるなりき、世の自稱預言者輩何ぞ自ら量らざる乎、

是の如く此の風紀鬆み宗教衰へたる今日、眞か僞か時々預言者(預言者とは天啓の類なり、必ずしも未然を預知するの謂にあらず)の現はるゝを耳にする毎に、

余輩は日蓮大士を想ひ起さざるを得ず、日蓮曰く我は佛陀の御使なり、日本國の柱なり、我を信ぜば國家の隆興、社會の改善日を期して待つ可けんと、今日の自稱預言者輩果して此の大抱負あり耶、固より余輩は其之れ有らんことを望む切なり、然れども未だ之を見ざるを憾む、勿論其中には大言壯語遙かに日蓮を凌ぐ者なきに非ず、或る人は自ら新預言者と號し、己れに名けて『メシヤ、ブダ』と曰ふ、讀者諸君の知らるゝ如く、メシヤは基督の異名にして、救世主の義、またブダは勿論佛陀にて、釋迦の稱なれば、『メシヤ、ブダ』とは卽ち基督と釋迦とを兼ねて、更に其上に出る者との義なるや一目瞭然たる也、豈唯『佛陀の使』のみならんや、大言も此に至りて極まれり、余輩は其實力が此の大言に副はんことを冀はざる

を得ず、嗚呼何れの日に之を見ることを得べき乎、其たちぎに成らざらんことを祈る耳、而して今日までの經驗に顧る所あるや、坐ろに日蓮を想ひ起さざるを得ず、

又日蓮の世に鳴れるや、大元の兵海を掩ふて我に寇せり、今日は露國と盛んに干戈を交へつゝあり、是また吾人をして日蓮を想ひ出さしむる一原因なるは言ふを俟たず、

夫れ此の如く社會及び教界に於ける目下の有ゆる出來事は吾人を驅つて善かれ惡かれ日蓮を回憶せしむ、是れ今余輩が聊か日蓮を研究せんと試むる所以にして、強ち無用の業にも非ざる可けん歟、此の日蓮大士なる者果して法華弘通の聖人なりし乎、將一世を瞞着せる奸雄の類なりし乎、开は章を疊ねたる研究の結果に問はん、

第二章　日蓮が大誓願を立たる精神如何

古來英雄豪傑が人生の各領分に興りたりしを稽ふるに、其偶然にして各自の領分に踐み入りたりし者擧げて數ふ可らず、シエークスピーアル若し鄕里の禁山に入りて鹿を獵らざりしならば、何ぞ無情冷刻の貴族に逐はれて倫敦に逃げ來らんや、或は永く二頃の田を耕へして稼穡に一生を悠々送りたらんも知る可らず、果して然らば天下には夫の勝妙殊絶、奇趣橫生なる快文字――シエークスピーアルの戲曲――終に出でずして止みたらん、

ダンテ若し伊太利亞にグエルフ、ギベリン兩黨の軋轢なくして、永く一市の長たる地位を保ちたらんには、何ぞフロレ

ンスを逐はれて江湖に漂泊せんや、何ぞ行路難を歌ひて四方に流寓せんや、焉んぞ又慨然春秋的賞罰の筆を弄して地獄の實見談を爲さんや、果して然らば是れ世界にダンテの神劇なき也、伊太利亞文學の爲、否な天下の文學の爲、痛く惜むべき事ならずとせん乎、

ネルソン若し其父家貧くして兒に富まざりしならば、又其母早く世を去らざりしならば、何ぞ然か速かに父の膝下を離れて叔父なる海軍大佐サクリングの軍艦に給仕の身とならんや、或はオクスフホールド大學に入りて神學を修め、父の職業を襲ぎて、著大なる一箇の牧師となりたらんも知る可らず、而して天下の海軍史上にはナイルの快戰なく、トラファルガルの奇勝なくして、ナポレオンは五十萬の大兵に海峽を渡過せしめ、遂に英國を征略して、馬にテムズ河に飲ひたらんも得て知る可らず、

固より、カーライルの言へる如く、英雄豪傑は其資凡ならずして悉皆精金なれば、何處へ往くとも第一流に出んことは疑なしと雖ども、其如何なる形狀を帶ぶべきかは、大に境遇と關係せずんばあらず、日蓮が大宗教家となりて、特に一宗を開きたる如きも、或は他に彼を驅て斯る大發憤を爲さしめたる事情あらんも亦知る可らず、

正統の傳記に曰く、鎌倉の浪士貫名重忠といふ者下總の國東條市河の郷小湊と名くる海濱に草廬を結びてありしが、路邊なる大野吉清の女梅菊といふを娶りて妻としけるに、承久三年初夏梅菊は日輪八葉の金蓮華に乘りて海上より

己が懐に飛入ると夢みて姙身し、之と同時に夫の貫名次郎重忠も亦鶴髪の老翁玉の如き一子を吾が掌上に載せて、今之を汝に授くれば大切に養ひ育てゝ遂に出家せしむ可し、必ず大善知識と成らんと諭せりと夢みたり、斯くて月満るや、種々なる奇瑞の中に一男子出生せしかば、例の日天子（太陽輪）の祥瑞に因て、善日麿と命名したり、善日額廣く眉高く鼻正しく色白く、視力強く、記憶凡ならず、見る人々神童と稱す、天福元年十二歳の春を迎ふるや、兩親かねて諭されたる老翁の言に基づきて出家させばやと、彼方此方尋ねたるに、小湊の北に當りて眞言宗の山寺あり、千光山清澄寺と云ひて、住職道善密師は殊に道徳の譽高かりしかば、是れ幅強と同年五月親子相携へ往きて願ひけるに、道善坊快よく承諾し、

乃ち名を薬王麿と改めさせ、稚兒姿のまゝ清澄寺に留まらしめたり、云々、是より星霜漸やく重なりて、薬王麿十六歳にもなりければ、遂に剃髪の肅典を茲に擧行する事になりぬ、此處より薬王が大誓願を起すに至れる順序は、廣く日蓮一代の事蹟を群籍に渉獵したる故人小川氏が通俗的に善く書き綴られたる者あれば、左に掲げて、先づ正統派の所謂る正傳何如んを見んと欲す、

『光陰は弦を離るゝ箭よりもはやく、春と明秋と暮て、今年嘉禎三年丁酉の冬、薬王麿も十六歳にありければ道善密師道場を淨め、一山の大衆を聚め、十月八日剃髪の規式嚴重に誦經梵唄みづから導師となり、薬王麿は御聲いさぎよく、恭恩入無爲眞實報恩者の文を三遍まで唱揚げ、翠の黑髪を剃落し、紅白の袂も墨染の袖とあらためたまひたる、……此より御名を是生坊蓮長と呼改め、諸事を擲棄專一佛理に心をゆだね、眞言瑜伽の奥藏を學

び給ひ、教相には眞言三部及び諸論等、事相には求聞持等の印契を相承し、法兄淨顯義淨の二人は、所化僧多きそ、の中にも、蓮長師をふかく憐み、學問の志をたすくるゆゑ、それかれと力を得て此程は一代藏經にとりかゝり、晝夜肺肝を碎き閲給ひしが、一日心に思すやう、佛法といへば、釋迦一代の法なるを、今八宗十宗に立別れ、己が隨意弘る法を、我こそ佛の本意を得たれとおもひ、彼をそしりこれを讃、さらに一轍なきに似たり、抑我が本師釋尊はいづれの宗旨ぞ、眞言宗か華嚴宗かまた教外別傳の禪宗なるか、今御經を案ずるに、決して諸宗兼學にあらず、大海の湖に二の味なく、如來の教法さだめて二の道はあらじ、其會釋を知らんには、智者とならでは協ふ可らず、倖ひ當山の本尊虛空藏菩薩は東方莊嚴世界の大菩薩にして、一切衆生に智慧を授けんとの誓ひありしこと、大集經に見えたり、其上法堂に安置の尊像虛空藏菩薩は、寶龜の開基以來稍五百有餘年、利益多かる靈像ときけば茲に祈願を籠ばやと、湯水を絶ち、食を斷じ、只管持念する事三七日、願くは佛智を得て、如來の本懷をさとり、あまねく諸宗の是非を明め、佛燈を一時に揚て、末世五濁の闇を照べし、願くは衆生利益の大願をあはれみ、日本第一の智者と成て給はれと、丹心骨を削りて祈ける、此御堂の側に清水を湛へし池あり、此池水に昼も猶明星の星影赫々として浮びたるは、いとも嬉しき奇瑞かなと、いよ〳〵丹誠祈念ありしに、その願滿ずる曉天に、夢現の境もおぼえず、朦朧たる其中に、白髮銀の如くにて、御眼の光冷凄き異人、影向ありて右の御手に光明まばゆき、大寶珠ともいひつべき玉を持、汝が祈る智慧を與んずとて、斯を渡し給ふ、蓮長師右の手にこれを受て、左りの袂に入收給ふ、嶺の嵐の音そひて、身に降かゝる露しぐれ、佛前高く見仰れば、本尊の寶龕にかけし關鑰の、おのれと脫て、金扉は八字に開けてありければ、大願すでに滿足しぬと、心中の喜悅たとへを取に物なく、此の曉の禮謝に、ふかく佛恩を報じ、本坊へかへらんと、御堂の階砌三四級、下立給ふ其折柄、俄に胸脇氣逼り、夥しく血を吐て、その儘氣絶し倒れ臥給ひけり、同寮の所化これを見出し、坊に擔ひ歸り介保せしに、忽夢の醒たる如く、聊御身に勞を覺えず、剩へこれより境智格外にひらけ、雲霧を拂て天の三光

を見るが如く、萬法方寸に浮ばずといふ事なく、辯舌また明了にして電光の如く、一言のもとに衆理を決す、是れ全く凡體不潔の血を吐つくし、暗に六根淨を證得したまひたる、利劍の程こそ尊とけれ、』

是より蓮長は日夜釋迦氏の本旨を見明らめんと務め、諸宗立異の紛々たるを慨き、奮然として思ふらく、徒らに山間僻地の寺内に良師なきに悶へ、苦しまんよりは、若かず大都會に進み出でゝ、各宗の名僧知識に吾が疑點を質し、之と議論を上下して佛教の眞面目を開拓せんにはと、頓て[illegible]の清澄寺を起ち出でつ、武藏野に逃水を追ふて、將軍の膝下たる鎌倉に遠征をぞ試みたりける、

已上は日蓮宗の正統派に於て傳へ降りし高祖大誓願發立史の大綱なりとす、其道筋整然として、眞に栴檀は二葉より

馨ばしく、大蛇は一寸にして能く氣を吐く者に似たり、只其言動擧止少しく餘りに規則正しきに過ぎて、聊さか演劇的(theatrical)なる趣なきに非るが如し、是に於て乎、何時の頃よりとも知らず、日蓮大士の腹心たりし某師の著述として、深密傳(四章を見よ)てふ者世に流布しついありき、日蓮師の所謂る内幕を暴露して赤裸々を極む、該傳――日蓮宗に於ける竹書紀年とも稱すべき者――の果して信ずべき者なるや否やは後章(第四章)に讓りて、茲には先づ日蓮の大誓願に關する該書の說如何んを瞥見せんと欲す、

『深密傳』中には開卷第一に降誕實記章および發心入門章ありて、日蓮の素生及び發心巔末なる者を忌憚なく叙述たり、往年の岩谷ならねど、余輩は勿驚の二字を揭げて、之を茲に

引かんと欲す、是其の說き出し來る所餘り無遠慮なれば也、云く——

（降誕實記章）

『抑房州長狹郡東條鄕市川村小湊の浦漁夫蓮治郞と云ものあり、累代此浦に住して漁りを業とす、然るに蓮治郞一男二女あり、姉を長女と名け、容顏世に類ひなし、玆に近鄕穢民に團五郞と云ふ少年ありて、是又世に類ひなきの美男子なり、長女不圖相見て機緣合して密通す、父蓮治郞之を憤り、遂に長女を勘氣す、時に長女已に孕めり、故に自ら團五郞に嫁す、月充て、人皇八十五代後白河院貞應元年壬子二月十八日誕生ましゝけり、名けて善吉と云ふ、此兒後に高祖大聖人となり玉ふ、佛滅後二千一百七十一年に當れり、然るに此小童容顏又た父より勝れたり、父母これを愛する如珠玉、時に善吉大志あり、故に獨り兵法を學び玉ふ、其才又衆に超たり、然れども事の應ぜざることを了知し玉ひて、是れより佛門に入て名譽を求めんと、遂に穢民の家を捨て、母の緣を尋て、漁家の種族と名乘り、八十六代四條院天福元年癸巳五月十二日十二歲にして、同郡淸澄寺道善坊の御弟子となりて、專ら眞言立敎を學び玉ふ、此時已に立祖開宗の御志ありけりと云々、嗟高祖の大智なる、穢民の家より出て遂に一宗の高祖と仰がれ玉ふ、此智德何人か及之乎、可贊々々、』

（發心入門章）

『高祖十二歲未だ御家にあらせられしとき、專ら出家の御

志願あらせ玉ふて近郷近隣の諸宗諸山に至り入門せんことを望まれ候ひしかども、諸宗僧徒出家の道理を知らず、生所の賤しきことを聞て是を厭ひ、是を悪み、是を弟子とする者なし、然れども全く父母共に穢民にあらず、母は正しき漁家の女なり、然れども只父獨り旃陀羅なり、而て諸人是を賤しみ是を穢とす、噫愚なる哉、夫れ佛門に入るときは、同じ釋氏にして、高卑の隔あるべからず、出家の法と云ふは、血脉を以て相續せず、法脉を以て相續す、然れば父祖苗裔は何ぞ撰ん、然るに諸宗の僧侶此理を知らざるが故に、出家を許さゞりき（高祖法門口決に曰穢民の類を弟子に取るときは諸人生所を知て輕蔑して信せず、故に遠國に至り出家さすべては必ず國にて出家さすべからず、同國なるし、然れども他宗は仁慈なき故に猥りに是を許さず、吾宗は他宗と異なり、仁慈を以てするが故に、旃陀羅の類は猶以て勸めて出家を遂げさすべし、然るときは彌よ法恩を知るが故に吾宗の幸なること多し、深く心得べき

ことなり、依て後世に永く傳へて一宗の模範とすべしと云云）、茲に同國清澄寺道善坊と云は、篤實仁慈の名隱れなき人なれば、母是を聞き、善吉を誘て登山し、明に始終を述べ願ふ、善吉側より申して曰く、江南の橘は江北に植れは枳となると聞けり、今我父旃陀羅なりと雖ども母は正く漁家の女のみ、何ぞ穢れと云べき理あらんと、云ひければ、道善坊是れを聞き曰く、吁々童の言ふ所理あり、吾何ぞ其生所の卑きを悪まんやと、遂に師弟の約をなし、善吉を改めて善日丸と號す（于時天福元年癸巳五月十二日也高祖年十二歳）、然れども朋友の門侶動もすれば高祖の生の賤を嘲る、爰に於て高祖初めて大誓願を立て曰く、吾卑賤より出たるを以て、諸宗諸師愚俗に至るまで、吾を輕蔑して止まず、出家を遂ぐるに至りても猶是を拒む、此の遺恨不少吾出家

して報酬をなさんと、延應元年己亥十月十八日十八歳にして出家し、名を是性と改め、字を蓮長と呼ぶ（蓮長の二字は即祖父と母とのなり依て名とす是孝の至りなり）、夫より佛經に心を止め、眼を論釋に肆し、未曾有の一宗を開き、諸宗諸法を破拆して、天下に一宗たらんと、大願を起し玉ひけるに、無量義經に至り未見眞實の文を見玉ひ、是れを據として是より以前の經は方便にして、無得道の經と判じ玉ふ、又妙法蓮華經を閲し玉ひ、豁然として此經に心目を止め玉ふ、其所以如何となれば、夫れ蓮花の德たる清水の中に生ぜず、泥土惡水の中に生じて、香色又諸花に超たり、是を以て一の蓮華經を拔取て此の一宗を開闢し玉ふ（この一義高祖自ら御身上に表する深意なりとの玉ひけり）、經文幸に大乘無上の妙典なり、何人乎之を尊ばざらんや、依て一宗を立て自ら法華宗と名乘り、諸宗無得道法華一人成佛と公言し玉ひ、他宗他法折伏し玉ふことは前に輕蔑せられて御憤りあるに依てなり、只恨みなくして他を誹り玉ふにあらず、高祖の他宗を破折し玉ふ所以は御憤りある故也、此本を知らざれば他を破するの意解し難し、是れ尊慮を不知也、故に不憚不恐他宗を誹謗すべし、是高祖の敵なるが故なり、吾門の輩永く之を模範とすべし、」

是豈駭くべき秘密に非ずや、正統傳には日蓮を貫名次郎重忠の子と稱す、而して此の貫名重忠は一領地の主なりけるに、北條氏より平家の殘黨に加擔すと猜がはれて、其領地を沒取せられたれば、止む無く漁業に從事して生を度れりとぞ、然らば是れ立派なる由緒ある者と謂はざる可らず、何ぞ

穢民の子ならん乎、但し此に一つ疑問の種たる者あるを奈何せんや、日蓮大士は其御名判中に自ら『日蓮は旃陀羅が子なり』と曰へり、是は抑も何の義ぞや、勿論旃陀羅(tchandala)は勿論梵語(印度の古語)にして、佛者は之を屠兒または殺者と翻譯し來れり、屠兒は牛馬の類を屠るを業とする者にして、昔は賤民これに從事せるは天笠日本倶に然りき、固より今日の屠牛家とは全く其性質を異にせり、今日の屠牛家は只一時の商賣に之を業とする而已、其家筋には非る也、然れども昔の屠兒は所謂穢多の類にして、該傳の所謂旃陀羅は穢民の謂なること他處にも見えたるが如し、卽ち日蓮が大鼓を擊ちて法華宗を弘むるに決するや、其父手づから太鼓の皮をはりて、之を日蓮に進附したりと稱す、是此の疑問の容易に解き去られざる所以なりとす、

若し日蓮果して穢多の子なりしとせば、實に深密傳に言へる如く、世人に輕蔑せらるゝに憤激して、愈よ大志を起し、大誓願を立てたる者と認めざる可らず、是れ決して日蓮の德を傷くる者にあらず、寧ろ却つて之を發揚する者と謂ふ可し、西洋に於てや例の猶太人は殆んど穢民視せらる、高等なる旅館は彼等を宿泊せしめざる也、上流の交際場裏は彼等の足跡を印せざる也、是を以て不世出の豪傑ザスレーリも初は世人の輕侮を蒙むり、其始めて議會に演說を試むるや、嘲弄若くは妨害熾んにして、其言を陳べ了る能はざりしかば、一聲高く叫んで曰く、諸君は本員を輕んずれば、今は此に壇を下らん、然れども他日諸君は悅んで本員の言議を聽か

んとする時來らんと、斯く言ひ捨て席に復したりしが、此猶太人遂に保守黨の首領となり、英國内閣の總理となり、露土戰爭の後には伯林に露國の使節を威屈し、月桂冠を戴きて還るや、ベコンスフヰルド公として雷名天下に轟きぬ、此人もまた是れ憤激して其天才を發揮したる者のみ、此類古來甚だ多くして、枚擧に暇あらず、

之を要するに、正傳深密孰れにしても、日蓮が非凡の天才なりしことは明瞭なりとす、王侯相將寧有種乎、偉人は皆偉大なり、皆純金なり、純金と純金との間に豈尊卑貴賤の差別あらんや、日蓮もまた英雄なる乎哉！

第三章　日蓮とジョセフ、スミス及親鸞

第一章に聊か論及せし如く、日蓮大士は種々の點に於て麼兒門教の開祖ジョセフ、スミスに酷だ似たり、日蓮は觀ずらく、八宗九宗それぞれ己が祖師の說に拘泥し、之を尊信すること本尊たる釋迦牟尼佛の言敎にも勝り、特に我が學べる眞言秘密宗に於ては金剛智不空弘法慈覺等の誨を本として、只管祖師たちを崇敬する而已、是豈佛敎の本旨ならんや、我は今より進んで釋迦氏の眞面目を究めずんば有る可らず、釋迦牟尼佛は何の宗旨なるや、豈釋迦如來に宗派あらんやと、遂に佛敎研鑽に要する智慧を己が寺なる虛空象菩薩に禱りぬ、

ジョセフ、スミスの爲したりし所また是に彷彿たり、麼兒門教は今や青山に本城を構へて、日本全國に布教せんと試みつゝあれば、彼が開闢主スミスの人と爲りを窺ふは決して無用の業にあらじ、先づ麼兒門教とは何ぞや、曰く麼兒門教とは卽ち一言を以て之を蔽へば、是れ基督教の聖經を(其正確なるだけは)極めて字面通りに解釋し、且之に若干の新天啓を加へ、百尺の竿頭更に幾歩を進めつ、以て舊來の基督教上に一新生面を開かんとする者なり、

但し誰が此の如き大膽なる事業を企圖せしや、何人が十九世紀の文明界に斯る絶大の計畫を立てしや、曰く、此人こそ是れジョセフ、スミス(Joseph Smith)と稱するクワイ男兒なりけれ、余輩は故らにクワイの假名を用ふ、如何となれば贊成者は之に當つるに『快』の字を以てせんとし、反對家は之を塡るに『怪』の字を以てせんとすれば也、疑問の燒點は實に玆に存す、

偉人豪傑の往々然るが如く、ジョセフ、スミスの少時は初めより濃霧中に隱れて世に顯はれず、百方揣摩臆測を逞ましうして彼を識る者多けれども、畢竟皆アポクリファ緯書)のみ、經書には非ず、要するにスミスも亦少時は天使にも非ず、惡鬼にも非らず、只人間なりし而已、或は酒も飲みたらん、煙草も喫たらん、ゲーテ曰く、青年よ、十分に汝の力を働らかせよ、愛する時は滿心を以て愛せよ、憎む時は熾んに憎めよと、區々たる譏譽は固より齒牙に掛くるに足らざる也、

スミスは十歳の時其生地青山州(ヴエルモント也、彼我共に先づ青山より始むるは奇と謂ふべし)

を去りてニウヨルク州のオンタリヲ郡パルミラ町に遠く移り、又次で數年の後同郡なるマンチエスタル町に遷りたり、

當時オンタリヲ湖邊の地方(卽ちニウヨルク州の西部)は百事新開地の觀を呈しをり、オハイオ州とイリノイス州とは尙渺茫たる曠野の趣を有し、ミゾリ州以西は實際未だ探險を經ざる荒服の土人國にてありき、既に斯の如くマンチエスタル地方は割合に住民淳朴なりしかば、宗教心も亦殊に深かりしは自然の勢なるが、恰もスミス家が該地に移りたる翌年、非常なる信仰復興茲に始まりて、人々殆んど狂せるが如く、熱心なる禮拜は各處に開かれ、讃美歌の響は耳を聾せんとし、說教の聲は四六時中些之の間斷も無かりき、然のみならず、メソジスト宗徒、長老宗徒、浸禮宗徒互に起ちて、各々我劣らじと振ひたりしかば、其結果として此等三派の間に激烈なる宗論を惹き起し來り、其喧囂紛爭は呶々嗷々として底止する所なからんとせり、

スミス家の人々は元來敬虔なる者なりしかば、此際に處して各々其去就を定めんとせしが、母のルーシを始めとしてハイラム、サムエル等多くの者は長老宗(Presbyterianism)を贊成して之が信者と成りぬ、然るにスミスは尙僅か十五六歲許の少年の事とて、多少向背に惑ひてありしにも拘はらず、大體は既にメソヂスト派に傾きゐたれば、今此有樣を見るや心中甚だ安らかならざりしと見ゆ、是に於て乎彼が眞理を看出して之に就かばやとの念慮は彌よ其熱度を高め往き

たり、思へらく此等互に相軋轢しをる幾多の宗派は孰れも皆悉く眞正なる者には非らじ、必らず其中に眞なる者假なる者あらんと、益々聖書を研究せしに、一日大いに我心を刺戟する文章に見當りぬ、是れ卽ち新約聖書中なる雅各書第一章五節にして、其語は實に左の如し、曰く『汝等の中若し智慧足らざる者あらば、夫の咎ることなく惜むことなくして衆人に與ふる神に求めよ、然らば予へられん』、

此等の文字は深くスミスの心に貫徹せり、スミスは再三再四熟讀玩味の後、遂に之に從ひて靈智を眞神に祈らんと決心せり、時は一千八百二十年の早春、空は晴わたりて、風爽かに、萬象玲瓏として美を輝かす朝夙に、我が家の周圍をめぐれる蓊鬱たる森林の中に只獨り忍び入りつ、端然跪坐して

始めて爰にスミスは聲を揚て天に禱れり、

嗚呼讀者諸君よ、此時にスミスの靈眼は開けたり、此時にスミスの精神は定まれり、此時にスミスの去就は決せり、一言を以て之を蔽へば、此時にスミスの天職は決定したる也、

但しスミスの所謂天啓神示とは如何なる者なりしか、請ふスミス自身をして之を語らしめよ、——

『我跪いて吾が心の願望を神に捧げ始めしが、其未だ之を爲しをへざるに、忽ち我は或る冥力の捕ふる所となりて痛く壓倒せられたれば、餘りに駭ろけるにや舌結びて物言ふ能はずなれり、四面暗黑となりて咫尺を辨ぜず、アハヤ吾が一命茲に終らんかと一時は思はれたり、然し乍ら滿身の力を出して援助を神に願はりつゝも、今は是まで

と絶望の裏に鬼物の我を殺すに委せんとせしに、恰も此大驚慌の一刹那を以て、我は不可思議にも一柱の光が煌々として日の光輝にも倍して吾が頭上に耀やけるを見たり、而て其光は段々降り來て遂に吾が上に達せしが、其顯はるゝや否や、忽ち斯の身は彼の敵鬼の繫縛を脱したるを覺えぬ、夫の光の吾が上に止まれるや、我は二箇の人物が――其榮光筆紙に描き得ざる有樣にて――空中に屹然として吾が頭上の處に立てるに接せしに、其一人は吾が名を呼びつ、他を我に指ざして曰はく、是れ吾が愛子なり、之に聽けよと、

今我が主に問ひたてまつらんとせし目的は、諸宗の中に て孰れが最も正確なりや、果して其孰れに聯なるべきやを承まはらんとするにありしかば、我は氣力を回復して物言ひ得るや否や、敢て此事を問まゐらせしに、彼等兩人物は答て曰く、汝は其何れの宗派にも就くべからず、其信條は皆是れ我が眼中に厭惡物なるのみならず、其之を信奉する人々は悉く腐敗し、唇を以て我に近づけども、其心は我に遠ざかり、人間の誡命を教義として誨ふる而已、其物たる神爲の形はあれども、彼等は之に神力あることを信ぜずと、

我は再び何れの宗派にも聯ならざらんことを命ぜられ、且其外にも今茲に書く能はざる幾多の事を告げられしが、頓て復己れに歸り見れば、我が身は仰向になりて天を瞻仰しをりぬ、」

是れジョセフ、スミスが宗教改新の大事業を企てたる第一歩履にてありき、是豈日蓮の行徑と大體符節を合する者にあらずや、スミスも諸宗中何れの宗最も正しき耶と問ひ、且之を識別すべき智慧を祈り、一時冥力の推倒する所となりて殆ど氣絶し、又竟に現在なる何れの宗派にも與する無く、別に一新眞宗教を立てよと諭されたり、而して又彼スミスも聖書の文(經文)を基己れに正確と見做るゝ限りは字面通りに解釋し、以て基督教の眞面目を發揚せんと企だてたり、實に是れ日蓮の發願と一事一事ことごとく相符ふ者に非ざらん耶、東西と洋を異にし、四百と年を隔てたるにも拘はらず、俱に最新最後なる近世的宗教として、其相一致するや寔に然か驚歎に堪ざる者あり、如何となれば日蓮も亦佛經の語を飽までも文字の如くに解釋し、信受せんと務めたればなり、例へば、佛教家は古來夥多の佛經を五時に區劃して、佛說の性質をそれぞれ甄別てり、第一を華嚴と云ふ、是は僅かに三週日に亘れる而已にて、一先づ中絶せられき、第二を阿含と云ふ、是は十二年にわたれり、第三を方等と云ふ、是は十六年に亘れり、第四を般若と云ふ、是は十四年に亘れり、第五を法華と云ふ、是は八年に亘れり、從來これを牛乳の精粗に譬へて曰く、第一は乳、第二は酪、第三は生蘇、第四を熟蘇、第五を醍醐なりと、無量義經に『種々說法、以方便力、四十餘年未顯眞實』といへる者是なり、四十餘年とは實は都合四十二年にして、普通の計算に依れば、釋迦は正に齡七十二歲に達せり、故に又曰ふ、釋迦牟尼佛は七十二歲にして講法の座を靈鷲山に

移し、爾後八年間法華妙法を講演したりと、勿論此種の區別たるや杜撰極まれる者なれど、佛者は多く之を信じ來りたれば、日蓮もまた固く之を信じたりき、既に之を信じたるが故に、又自然に法華經を群經中の最勝至妙なる者と尊とぶに至りぬ、如何となれば、『四十餘年未顯眞實』と既に說かれたれば、法華以前の諸經は皆權謀方便にして、眞理は獨り法華に限るべしと推斷せられしが故なり、但し此の如く自經の功德を主張して他經を貶損することは諸他の大乘經にも往々見えたる者にして、實は是れ其各自の大乘經を述作せる哲人が自經の尊信を博せんが爲に特に挿入せし慣用文句たることは先輩の已に看破したる如し、是れ佛敎界に宗論の囂々たりし所以なりとす、其實を言はんに、法華經は、

（平田篤胤が評定せし通り、）功能書のみ夥だしくして肝心の藥紛失したるが如き觀ある者なり、從來研學者これを遺憾とす、華嚴般若等の類は却つて深邃なる哲理を說きて、甚だ敬重すべき點衆き者なるは亦是れ、江湖に知れわたれる事實なるに非ずや、

之を要するに日蓮は其功能書の立派なるに目眩めきて、竟に法華妙法てふ藥の紛失しあるに心づかざりし也、然し乍ら既に斯く信じて見れば、法華經の一言半句も悉く金玉と認められたるは亦是れ自然の數のみ、卽ち法華經內なる左の文句の如きは尤も日蓮を心醉せしめたる者なりとす、曰く——

『藥王、今告汝、我所說諸經中、法華最第一、』

『我所說經典無量千萬億、已說、今說、當說、而於其中此法華經最爲難信難解、藥王、此經是諸佛秘要之藏、不可分布妄授與人、諸佛世尊之所守護、』

『若人不信毀謗此經則斷一切世間佛種、……其人命終入阿鼻地獄、』

『若有聞妙法者、無一不成佛、』

『我滅度後、後五百年中(二千五百年代)、廣布流布、於閻浮洲無令斷絕、』

『如來一切所有之法、秘要之藏、於此經宣示顯說、』

諸ろ此の如き經文を日蓮は字面通りに深く信じたり、否な啻に經文のみならず、論傳等をさへも廣く信じたり、例へば傳敎大師が我日本天下圓機既熟圓敎遂興と說きたる如き、瑜珈論に東方有小國、其中唯有大乘種姓と記したる如き、法華傳に佛日西入、遺耀將及東北と見えたる如き、凡て日蓮の爲には法華弘通に崛强なる根據と認められき、日蓮は眞に此等の言說或は預言を重んじて、遂に自ら其預言に應じて法華弘通の器とならんと奮勵したりと見ゆ、是また實にジョセフ、スミスが亞米利加に於て爲したる所なりき、スミスは聖書中なる制度をも預言をも悉く其儘に信受し、且其預言中未だ應驗せざる者をば之を己れの身に又は己れの敎會に當てたり、例へば馬拉基書第四章及び第三章を以て末日(彼等は今日を末日と云ふ)に於る麼兒門敎會と社會とを指せる者と爲したるが如し、此精神を以て彼等は又ユタ移住の當時に起れる蝗蟲の大害をも聖書中に於ける預言の成就したる者と主張したり、

『麼兒門教徒は大鹽湖市に到着するや、五箇月内に廣大なる土地を耕やして馬鈴薯を植ゑ、灌漑の便を設けて各般の種子を蒔きつけしに、菜蔬禾穀蔚然として茁生せしかば、聖徒の愁眉將に漸く開けんとせる折柄、嗚呼情ない哉、周圍の山腹より幾億萬の蝗忽然として群がり降り、恰も餓虎の餌を貪るが如く、嫩綠を襲ふて之を食ひ、其幾縱隊となりて滔々と前進するや、大軍の境を壓して來るが如く、萋々蒼々たる折角の園圃も倏忽の間に一面の荒野と化せんとす、到底溝火や掃箒の能く防遏し得る所にあらず、衆庶額を蹙めて長大息し、一同聲を揚て天帝に哀訴するや、嗚呼又奇なる哉、妙なる哉、非常の災は天帝之を防ぐに非常の手段を以てし給ふにや、突然として意外の救は寔に意外の邊より顯れ來りぬ、一朝鹽湖の方面に颯として風起るや、幾千の鳥群翩翻として飛び來りつ、幾尺の雪と見るまでに遍く地上に覆へる蝗蟲の上に悠然として舞ひ下り、宛然ヴヰルヂルが所謂ハーピー〔貪食鷲〕の如く且捕り且食ふ、其幾萬なるを知らず、殊に斯鳥の絶奇たるや一たび飽まで喫ひて腹に滿るや、去て之を其肚裏より吐き出し、再び來りて之を啄むこと、恰も天然の鵜飼の如く、又古代の羅馬紳士の如くなりければ、其一日に幾回啄食するを知らず、而して晩景に垂んとするや皓翼を鼓して飄然北天に飛び去りぬ、斯の如きこと數日にして蝗蟲幾んど跡を絶てり、此神禽は是れ大鹽湖中の島嶼に群棲せる鷗屬にてありき、今や此水鳥は、恰も鵝鳥が羅馬のカピトル宮に於る如く、麼兒門教徒に神聖なる靈禽となれ

り、而して此奇蹟たるや全く聖書の中に於る預言の應驗したる者と信ぜらる、

（註）歴兒門教徒は信ずらく、此奇絶妙絶なる出來事は全く約耳（エル）と云ふ預言者が今より大凡三千年前に於てユダ國に宣說せし所の者に係ると、其預言に曰く（約耳書第二章）、

「1汝らシオンにて喇叭を吹け我聖山にて音たかく之を吹鳴せ國の民みな慄ひわなゝかんそはエホバの日きたらんとすればなり、すでに近づけり 2この日は黑くなぐらき日雲むらがるなぐらき日にして東雲の山々にたなびくが如し數おほく勢さかんなる民むれいたらん斯かる者はいにしへよりありしこと無くのちの代々の年にもあることなかるべし 3火彼らの前を焚き火焰かれらの後に燃ゆ其の過ざる前は地エデンのごとく其過しのちは荒はてたる野の如し此なのがれうるもの一としてあることなし 4彼らの狀は馬のかたちのごとく其驍ありくことは軍馬のごとし 5その山の巔にとびをどる音は車の轟くがごとしまた火の稗稈をやくおとの如くしてその樣强き民の行陣をたてゝ戰陣にのぞむに似たり 6そのむかふところ諸民戰慄き其の面みな色を失ふ 7彼れは勇士のごとくに趨あるき軍人のごとくに石垣に攀のぼる彼ら各々おのが道を進めゆきてその列を亂さず 8彼ら互に推あはず各々その道にしたがひて進み行く彼らに刃に觸るとも身を害はず 9彼らは邑をかけめぐり石垣の上に奔り家に攀登り盜賊のごとくに窓より入る 10そのむかふところ地ゆるぎ天震ひ日も月も暗くなり星その光明を失ふ」

又上に論及せる馬拉基書第四章及び三章部分は左の如し

「萬軍のエホバいひ給ふ、視よ爐のごとくに燒くの日來らん、すべて驕傲者と惡をおこなふ者は藁のごとく焚けん、其來らんとする日彼等を燒つくして根も枝ものこらざらしめん、ニされど我名をおそるゝ汝らには義の日いでゝ昇らん、其翼には醫やす能をそなへん、汝らは牢よりいでし犢の如く躍らん 三又なんぢらは惡人を踐つけん、卽ちわが設くる日にかれらは汝らの脚の掌の下にありて灰のごとくならん、萬軍のエホバこれを言ふ 四なんぢら吾が僕モーセの律法をおぼえよ、すなはち我がホレブにてイスラエル全體のために彼に命ぜし法度と誡命をおぼゆべし、五視よエホバの大なる畏るべき日の來るまへ

にわれ預言者エリヤを汝らにつかはさん、かれ父の心にその子女を思はせ、子女の心にその父をおもはしめん、是は我が來りて詛をもて地を擊ことなからんためなり、」

「十七萬軍のエホバいひたまふ、我わが設くる日にかれらをもて我寶となすべし、また人の己につかふる子をあはれむがごとく我彼等をあはれまん、十八その時汝らは更にまた義き者と惡き者と神に服事る者と事へざる者との區別をしらん、」

日蓮とジョセフ、スミスの行動是の如く酷だ相似たり、俱に又佛陀若くは天帝の特別なる委任を受たる者の如く振舞へり、俱に其道の復古的發展を以て自ら任ぜり、俱に依、法、不、依、人とて、經典の本義に專ら歸決せんと務めたり、俱に直接の天啓を受け、或は昔日の預言に應ずと信ぜり、俱に幾多の奇蹟を行なひ、種々の休徴を顯はせり、と云ふ、此の自任、自重、自負、自尊、自信、是れ亞米利加に於ても、日本に於ても、彼等に成功を來せし所以なり、己れ自ら疑がはゞ、誰か信ぜんや、已れ自から確信してこそ然る後人また確信すべけれ、先づ己れ自ら尊重せよ、然らば人また汝を尊重せん、

彼等の主張は俱に絶對的なる者にてありき、法相宗は華嚴宗と或は兩立し得ん、天臺宗は眞言宗と必ずしも相排ぞけじ、然れども日蓮宗は廢三顯一とて、以前の諸教文を悉く廢捨し、以て一乘最上乘の法華を建立せんと欲す、是れ絶對的妙教なりとす、ジョセフ、スミスの立教も亦然り、爾前の諸宗派を盡く不完未了と擯ぞけつ、獨り麼兒門教を以て絶對的眞實無妄の正教と爲す也、是を以て雙方とも、日蓮もスミスも、實は從前の有ゆる宗派と軋轢し、全く天下を敵として戰

かふ者にてありしが、其困難も此に在りしと雖も、其成功も亦實は此に在りたりき、之を譬ふるに、今までは宗教界十宗十義百宗百義にして、諸侯割據、天下四分五裂の勢なりしが、日蓮、スミスは則ち此の戰國的狀態を戡滅して、直ちに宇内を統一せんと企だてたる者なりとす、俱に是れ從前の衆祖師に倣はず、絶對的革新てふ新機軸を出したるが故に、然なくば褊小の立脚地だも獲られざらん境界に在りながら、忽ち少なくとも天下を三分して其一を有つの大成功を來しぬ、勿論ジョセフ、スミスは一千八百四十二年を以てイリノイ州カーセージの獄舍裏に暴徒より銃擊せられて命を殞したれども、寔に殉教者の血は教會の種子なるが故に、其宗教は却つて長足の大進歩をこそは爲したりけれ、

日蓮も亦然り、一たび『龍の口の御難』を經たるや、信徒の數は却つて日に月に殖え增せること七里が濱の沙よりも多からんとせり、立宗の眞僞は姑く措き、兩傑俱に稀有の天才を顯はしたる者と稱せざる可らざる也、

最後に一言せんに、日蓮はまた種々の點に於て親鸞聖人見眞大師に學べる所多かりしや疑を容れず、脫胎換骨的に親鸞に模倣したり、勿論親鸞を通じて法然圓光大師、惠心等にも學べる者とす、夫の觀心鈔に日蓮が所謂

『不識一念三千者佛起大慈悲五字內裏此珠令懸末代幼稚頸』

は一向專念の稱名と其精神を同じうす、但し念佛と題目（法華經）との關係は第七章に於て詳論せんことを期す、今は姑

く預かりおかんことを便とすれば也、

第四章　深密傳とスポールヂング譚

前章に論及せる『日蓮深密傳』と云ふ一書は實に日蓮大士の爲め、及び日蓮宗其物の爲に、痛く殃をなす者にして、之を十分に駁倒せずんば、一師一宗の面目を傷つくる甚だ大ならんとす、然るに日蓮宗の學者輩は只頰を蹙め、眉を顰むるのみにして、未だ眞面目に之を辯駁せんとは試みざる者の如し、其不利や重大ならんとす、如何となれば世人の事を好むや、滔々相率ゐて之を信ぜんとすれば也、日蓮宗大學林教師河合日辰僧正の如きは日蓮の觀心本尊鈔を註するに當り、日蓮の人格を論じて曰く、

『先師曾て億々萬劫論を著して云く高祖は近くは法師品の凡師遠くは億

々萬劫より不可議に至らざれば本地をば知ること能はずと云へり予も亦往年（明治十年十一月廿四日夜半）薩量品の一佛始終の法門と（是は且く別佛に約して通途の說を指す）祖師の無問自說の三德具備とに依て果德に約せば釋尊の再誕因行に約せば上行の再誕なることを決せり（此事は一大事因緣記に略して述せり）日蓮と名乘り玉ふについて且く四義あらん歟一には母御前日輪蓮華に乘りて懷中に入り玉ふと夢を御覽ありて御懷妊し玉ふ故歟二には日本國に生れ玉ふ故に日と云ひ其の御誕生の時に靑蓮華海中に生せし故に蓮との玉ふ歟三には經に本化のことを說て如日月光明等又如蓮華在水等とある故歟四には日天子及び釋尊（佛は果なる故に蓮なり）と同體なる故歟其證は四條金吾書（內廿八十五六）云大日天子と申すは宮殿七寶也（止四天下を一日一夜に廻り四州の衆生の眼目と成り給ふ止）是れは非可疑（眼前の利生也敎主釋尊に不御坐乎）如是あらたなる事候べき文又云日蓮をこひしく思食し候はば日天子ををがませ給へ、いつしか影を移す身なり等云云由此觀之三體即一の世尊なること敢て疑ふべからず、問如說尊體ならば國王大臣の家に出現し玉ふべし何ぞ下賤（源を尋れば鎌足公の末孫なれども今漁夫故）の家に生れ玉ふや、答妙法の功德を光顯せんが爲めなり何んとなれば若し國王等の大家に誕生し玉へば何かに强折し玉ふとも威光を恐れて唯々面從するのみ誰か杖木瓦石を加へんや何に況や死罪をや然るに若し龍口の大難なくんば妙法の功德顯れず何んとなれば此時衆人謂へらく日蓮は下賤の小僧のみ何んぞ此れに威德あらん唯だ所持の妙法に威光勢力ある故に刀尋段々に壞れしならんいざや妙法に歸せよと手を引き袖を引て改宗する人其の數を知らず（然ども法に歸したる後は復た人にも歸するなり）其の他の數難皆な此の例なり故に高祖は已に出現以前より吾身を捨て顧みず只管妙法を弘めて國家を泰山の安きに置んと欲するのみ吾身の爲にすることは秋毫もなし是れ從果向因の菩薩なる故なり然に世人此れを知らずして深密傳等の如き僞書（此書は數十年以前より或人が僞作せるものなり然るに今日始て出版せしは故あらん若し晋宗の者昔より如此書は名をも聞かず故に僞書なりと云ならん然る時は彼れ云ん汝の不知不學なるが故なり數十年以前より此れありしなり是れを見よと云ふて古るき書を見せて此の古るきことを見よ數十年以前の書なりと責めんが爲に數十年も以前に僞作して居ながら今日まで出版せざりしことなり此事予不思議の緣を以て慥に證據を得たり）を作りて諸人の信仰

を失はしめ妙法の弘通を妨んと欲す然れども高祖は益々御滿足なり何んとなれば元より本末有善の衆生を救ふを旨とし玉ふ故に日蓮は非滅現滅して居れども彼傳深密は邊鄙山野の奥までも飛び走り田舍の小女に至るまで毒鼓を擊て遊ばしむと大喜充滿身甘露を以てそゝぐに熱を除て清涼を得るが如く思食すらん請山海猶ほ譬へ難きほど續々出版有之度く南無妙法蓮華經』

吁嗟是れ何たる放言ぞよ！負惜みも亦甚い哉！宛然理窟に窮したる者の徒らに大言壯語して一時を糊塗んとするに彷彿たり、何ぞ身延山内より之が反證を取り出し來らざるや、是れ該傳は身延山内に秘藏せられ來りたりと稱すれば也、今少しく深密傳の性質及び由來を研究せんに、先づ其奥書には左の一文ありて、讀者を驚かしむ、曰く――

『右此一部の書考は日昭聖人日朗上人等の御筆にして、身延山第一の秘書なり、日常上人御定として、貫主たりと雖も、六十歳未滿の内は拜見を許さゞる者なり、然る處十一代日朝上人の御代山内御評議の上萬々一紛失等有之節の爲め明應八年八月別に一部を書寫し玉ふ、然る處智積院日廣上人又密に此を寫し玉ふ、是に依て、この日廣上人は師匠の勘氣を承け擯出せられ給ふ、其時この一部を持て岩本實相寺に隱れ給ふ、此時身延山より御末山へ密々御賴にて、若しこの深密傳見當り候はゞ、早く取上可申若他宗の手に有之候はゞ、よくよく謀を廻らし是を取戻すべし、止事を得ずんば其持主を伐て取上べし、又他にて此書を見て、悉く知る者あらば此は全く高祖の實傳にあらずと急度答可申段、御賴みありし事也、（委細は本山の記錄に在る事也）、然處

愚僧遊覽の砌實相寺に於て寫之者也、

光長寺　日長』

天正五年五月十三日

但し此中なる日常上人とは何人ぞや、是即ち妙法神驗章中に於て自ら「五郎」と名のれる人なりとす、該傳の著述者と申すは此人にこそ、彼れ富木五郎（後の日常上人）は世人が日蓮を罵りて彼は狐を使ふと云へるを打消さんと計りけるとなん、即ち彼記して曰く、

『是より先鎌倉に小治郎常世と云ふものありけるが、其妻卒に狂病を發するとき三人の山法師絶道と云ふものを請待して、加持す口はしりて云吾はこれ松葉谷の庵室より來れり、只妙法弘通の爲にして曾て情慾の爲にあらず、故に我主日蓮を信向供養せば、必ず去るべしと依て常世高祖に贈りものなしけるにそれと共に去て、其病拭ふが如しと故に野干を使ふに必ず若狐を使ふべからず誤ることありと吾等に御物語りありけり、此時より世上の惡徒等高祖を罵言すること甚しく、擧て日蓮は狐を使と云ひ傳ふ（此時常世に付けるは小狐なり、妻に身入れしは誤りとの玉ふ）、然るに今又高祖其實を五郎に語り玉ふ故、五郎も亦世の人口を恐れて深く謀て曰く、此地幸に猿畠と云へり（猿畠と云へることは昔土地開けるとき邊土なる故猿畠多しとされば開けて働く畠となる故を以て此地の字となる源氏以後此處に又山王の社を建築す緣最も深し）故に公に食を給せしは猿なりと流言して此の浮說を妨ぐべし、さなきときは公の惡名高し、いよ〳〵御思慮をめぐらし給へと云ければ、高祖喜びにたへず、厚く禮謝して、尊四菩薩の像を彫で五郎に贈與す、五郎之を安置し、法華堂を（山中法華寺是なり、代日日常即五郎なり）建て、高祖靈狐を以て奇瑞を顯し給ふ秘密の口訣皆五郎に附與す、五郎之を嗣で加持祈禱するに頗る妙あり』

是また愕くべき告白にあらずや、但し富木五郎とは如何なる人物なりし乎、伊東洋二郎氏の該「書考」評言ひ得て甚だ明瞭なる者あり、大いに參考す可し、曰く――

『按ずるに此深密傳の起草は弘安五年なり、而して此原書の確實なる事を

保證したる人は日常なり、日常は本と總州葛飾郡若宮村富木胤繼と稱する素封家にして、日蓮の蓮長と稱せし頃より衣食資財を遣りて學問修行せしめたり、實に胤繼は日蓮の大檀那なり、故に日蓮は毎に語りて云く、我れ若し上行の再誕ならば、富木殿は無邊行なる可しと、後ち建治二年胤繼は身延山に登り、日蓮の剃刀を受けて、薙髪入道し、日常と號す、日蓮の入寂するや、其遺命に依て中山法華經寺第二世を繼ぐ、日蓮も亦た日常の殊勝なるを見て、秘書百餘通を授與したりと云ふ、是に由て之を論ずれば、此深密傳の眞僞を日常が鑒定したりと云ふは妥當なり、殊に夫れ日蓮と日常との間は、世緣法緣共に甚深なりしが故に、日蓮の弟子上首六老僧と雖も、日常に對しては其臀後に就かざるを得ざりしなり、然らば即ち縱ひ日蓮の滅後日興日朗等が交る〳〵延山貫主の大權を握れる時と雖も、日常が延山の密書を鑒定せられずと云ふの理なし、且夫れ日常の未だ入道せざりし前に、中山法華經寺を開基し、日蓮を以て開山と爲したる事ありとすれば、日常は常に日蓮に親炙して、其秘密口傳を相承せし事の多きは、六老僧と雖も及ぶ可らず、其日常にして、此深密傳を確實なりと保證する限りは、焉んぞ此書を虛妄なりと爲すを得んや云々、』

兎に角日蓮師が此の富木氏に秘書類を多く示せしことは眞實なりと謂はざる可らず、例へば日蓮は文永十年四月二十五日例の『觀心本尊鈔』を書き了るや、其翌日左の一書（副狀）を添へて之を右の富木に示したり、如何に富木が日蓮の腹心なりしかを知るに足らん、

『帷一墨三挺筆五管給候畢觀心法門少少註之奉太田殿敎信御房等此書日蓮當身大事也祕之見無二志可被開拓之歟此書難多答少未聞之輩人耳目可驚動之歟設及他見三人四人並座勿讀之佛滅後二千二百二十餘年未有此書之心不顧國難期五五百歲演說之乞願歷一見末輩師弟共詣

靈山淨土ニ拜見ニ佛顏貌恐恐謹言

文永十年太歳癸酉卯月廿六日　　日蓮（華押）

富木殿』

我輩は再言す、深密傳を打消すべき反證は（若し在らば）身延山より出で來らざる可らず、單に僞書僞書と大聲疾呼するのみにては未だ足れりとせず、此まゝ打捨おかんには、日辰僧正の言へる如く、眞に『田舍の小女』までも之を諳んずるに至らん、豈南無妙法蓮華經」と祝しつゝあるべき事ならんや、余輩は日蓮宗の爲に身延山中より本件に關する周到の辨明出んことを切望す、

但し奇なる哉麼兒門敎もまた之に類する厄難に嘗て遭遇せり、之をスポールヂング譚と稱す、嗚呼スミスと日蓮とは飽までも兄弟なる乎、哉！余輩嘗て聊か之を究めたるに、大凡左の結果を得たり、未だ終極とは謂ふ可らざらんも知らずと雖ども、一應は雪寃の効果を呈せる者に似たり、

『ジョセフ、スミスが麼兒門經を掣げて天下に號令せんとするや、幾多の迫害及び讒誣は自然にして簇生せり、中に就て最も廣く且長く其勢力を維持したる者は所謂スポールヂング譚(the Spalding Story)なりとす、スミスの少時ペンシルベニア州のアミテ(Amity)地方にスポールヂング(Solomon Spalding)と名くる新敎牧師あり、亞米利加土人に關する歷史小說を作り、題してManuscript Story(古寫本譚)と云ふ、然るに此牧師貧にして自ら之を刊行する能はず、空く筐底に藏めおきて其身は早くも歿したり、而して其寫本は久しく紛失して影をも

留めずなりぬ、是に於てか、ジョセフ、スミスが麼兒門經を飜譯し刊行するや、スミスの敵たる人々は（中には該教の墮落者ホルボルトも在りき）主張して曰く、スミスはスポールヂングの歷史小說を剽竊襲蹈せる而已、猶何の金版か有らんと、一犬虛を吠て萬犬實を傳へ、眞に喧々として噪獰を極めたり、而して識者の中にも之を信ぜる者多かり、ガニソン（Gunnison）の如く公平を務めし徒も比々皆然り、否な今日に於も尙之を喋々しつゝある者鮮なからざる也、

一千八百三十三年（麼兒門敎の尙二葉にて在りし頃）ヘンリ、レーキ（H. Lake）と云ふ人宣誓して明言すらく、『我は嘗てスポールヂングと組合て業をなせり、其間ス師は屢々自作小說の稿本を我に讀きかせたるが、今麼兒門經を見るに及んで、其の該小說と暗合するの著きに吃驚せざるを得ず』と、又曰く『一千八百十二年ス師は其稿を携て出版旁たペンシルベニア州の都會ピッボルグ（Pittsburg）へ往きしが、爾後寂として復音沙汰なし』と、

此證言に本て世人は推斷すらく、ス氏其稿本を活版屋に托し、リグドン（Rigdon とてモルモン經翻譯の際スミスの爲に執筆者となれりし者の一人）をして之が校訂の任に當らしめしなるべく、而してス氏間も無く死たりしかば、リグドンは之を携てスミスに到り合せしなるべしと、然れども調査の結果は此話をして虛妄なる者とならしめ了りぬ、スポールヂングは其未刊の稿を懷いて一千八百十四年にピッボルグを去り、二年の後失意の有樣にて同州の南部に死し、其未亡人はニウヨルク州のオノンダガ郡に三

年を費やせし後、再嫁してマサチユセッに移りけるが、其間に夫の小説稿本は紛失し畢れり、然るに此稿本紛失してありしかば、世人は復も説をなして曰く、ストールの許に在る間にスミス之を盗みたりと、

固より麼兒門教徒は常に其僞なる事を辨じつゝありしと雖も、該小説の原稿の出で來らざるは少なからぬ不利益を彼等に與へてありき、然るに麼兒門經公刊の後大凡五十年の後、卽ち一千八百八十四年を以て玆に一大警報は合衆國の東北隅より起り來りぬ、偶まオハイオ州オベルリン大學の總理フェデルチヤイルド(President James H. Fairchild of Oberlin University)氏非廢奴的運動に關する舊文書を博く索めんと欲して文友ライス氏(Hon L. L. Rice とて近頃布哇ホノルル府滯在の高等官たりし者)の頃者購ひ得たりし反古紙堆裏を檢べけるに、嗚呼意外なる哉嗚呼奇妙なる哉、忽然として其の中より夫の――五十年來の尋物たる、然か久く幾多の誣妄の種たりし――歷史小説は端なくも顏を出だし來りぬ、是に於て乎該名にし負ふ公明兒は其翌年二月五日の新約克ヘラルド紙上に之が巔末を公けにし、遂に論斷すらく、

『麼兒門經はスポールヂングの小説に起因せりとの臆説は蓋し抛棄せずんば有る可らず、ライス氏と余と其他の人々とにて之を精査したるに、此等兩者の間には毫も其似たる所あるを見ず、要するに、麼兒門經の起原につきては、若し果して説明の必要あるならば、他に之が説明を求めざる可らず、』

其後一千八百九十五年、即ち今より僅五六年前に該總理が某氏(J. H. Hindley)に與へたる書翰中には實に左の明白なる文字あるを見る、云く、拜啓本校の圖書館にはソロモン、スポールヂーングの精確なる原稿を藏し有之候、……右の原稿は少なくとも二回既に刊行せられ候て、其一はユタ州なる大鹽湖市のモルモン教徒、他の一はアイオワ州なるジョセフ宗徒(モルモン教の一派)に御座候、ユタ州なるはホノルヽのライス氏より獲たる寫に本づき、ジョセフ宗徒のは小生が與へたるに依れる者に候、要するに此原稿はモルモン經の原本には無之候頓首、オベルリン大學總理フェアルチャイルド」、

麼兒門教徒の爲には何たる好發見なりしぞや！」

余輩は日蓮宗の爲にも幾多の有利なる反證の一日も早く出でんことを祈らざる可らず、

偖余輩は再び初へ立歸りて問ん、該日蓮深密傳とは果して

如何なる秘事を載たる者なる耶、曰く、开は上にも再三論及せし如く、日蓮の腹心たりし人が日蓮の施せる妙法弘通の秘計密策を一々筆書して該宗の靈山身延に藏めたる者と稱す、而して其書(所謂深密傳)中に說ける所極めて奇拔、極めて豪放、決して門外漢の後世に僞作し得べきが如き者にあらず、未だ日蓮の全豹を描き出し得ざりしが如しと雖ども、其大いに日蓮の精神を得たる者あるは、識者の夙に許せる所にして、少なくとも升堂以上の靈筆と謂ざる可らず、富木五郎入道日常師の筆と稱するも何の不可か之有らん、勿論日蓮大士の自書に非ざれば、多少事實の誇張或は譌傳はあるらしと雖ども、大體に於ては如何にも日蓮の公然たる事蹟と精神に於て一致すれば、秘密中の大々秘密を除くの外

は頗る信據す可き者と思はる、而して秘密中の大々秘密は日蓮の胸懷獨り之を知る而已、日常といふとも、日朗といふとも誤解は必らず免かれざりしならん、故に我輩は、孟子の如く、該傳を說くに、文を以て辭を害せざらんことを期し、辭を以て文を害せざらんことを欲す、左の一章の如きも善巧方便の一手段として之を見ば、日蓮の大成功を領會するに於て、蓋し思の半ばに過ぐる者あらん歟、祈禱奧義章に曰く、

「或時高祖吾等の密法口訣皆傳の法子を召て、の玉ひけるは、今我室內にて、一芬の密書紛失せり、汝等尋ねて出すべしと、此時吾等一同に立騷ぎ此處彼處を探り求れども知れず、互に唯朋友を疑ふのみ、皆顏色を失ふて茫然たり、時に高祖神佛を祈て是れ出せかしと命じ玉ふ、故に衆侶皆心を勵まして誦經し唱道すること一時程なり、然れども遺失の書出でず、時に高祖は子等に皆痛秘を傳へんが爲に隱せしなりとて、坐し玉へる疊の下より出して曰く、汝等の力にて尋ね求めんと欲して祈るとも、隱したる吾ならずんば明には知るべからず、是れにて可考、今世人の病を祈らんにも、我方より結びし法にて病める病は難病と雖ども治せずと云ふことなし、これその結びし法を解す故也、祈をなさんと欲せば豫め人の心に氣付ざる先に、法を結び、次第に煩はしめ、來りて救を乞ひしとき其法を戾せば、祈て驗あらずと云ことなし、是自ら隱せし物を自ら出すが如くなる故なり、抑此法は吾遊學の砌京吉田大祀兼益門人(阿部安弘)より神道第一奧秘傳なりとて、授與せられし也、是故に祈禱を事とせば、先づ煩はしめんことを先とすべし、自然に出たる病は自然にあらざれば治せず、宿報の病は又治するの期あるべからず、この理を知らずんば、祈禱の驗を顯すこと成り難し、此れ祈禱の法に於て秘中の秘、密中の密とする處也、深く可秘昔年吾豆州伊東に制せられしとき、その地の人民、吾れを賤みて信せず故に吾謀りて、伊東庄司朝高を病ましむ、時に諸醫手を盡すと雖ども功なし諸宗の恐僧山伏坐

頭等祈をなすと雖ども其驗病日を追て重し、このときに至り、來て妙法の法救を乞ふ、吾曰汝等疾く自餘の邪を除き捨てゝ、吾門下とならば、必ず是を救ふべしと諭しけるに、朝高速に宗を改めて吾に隨喜す、こゝに於て吾法を解き念持するに沈痾拭ふが如く立處に快し、此時に一邑責ずして降り勸めずして歸す、里人の密とする所なり、云々

固より宗教家は布教の手段に權謀術策を用ふ可らずと雖ども、古來往々之を使用したる者あり、回々教の開祖マホメットが鳩を使ひたる如き是なり、マホメットはかねて鳩を養ひおき、之をして己が耳の中なる豆を喙むに慣しめたりしが、或る時大衆に向ひて說教するや、俄かに肅然容を正しうして曰く、諸君よ今將に天より示現せらるゝ事あらんとすと、忽ち一羽の鳩飛び來り、マホメットの肩に止まりて、耳に何事か囁く者の如し、衆聽聞人驚歎して措かず、未曾有絕奇と稱す、何ぞ料らん是れマホメットが命じて放たしめたる鳩ならんとは、鳩は放たるゝや否や、其かねて教へ慣されたる如く、マホメットの耳に豆を喙まんとて飛び來りし而已、併し乍ら其工夫は卽ち眞に未曾有なりき、敬虔なるコロンブスも亞米利加土人の無知なるに乘じて日蝕の天罰を唱へ、以て土人を畏服せしめたり、武士道を重んずる信長も今川義元と戰はんとするや、熱田の宮に投錢の祥瑞を示し、以て兵氣を鼓舞したりと稱す、英雄人を欺くと云はゞ云へ、亦是れ善巧方便なる而已、

日蓮大士が妙法弘通の計策實に千變萬化にして、殆んど端倪す可らざる也、而して其然か權略を用ひたる事をば日蓮

は大事の前の小事として之を自ら是視したり、否彼は妙法弘通(布教)の爲には人命をも重んぜざらんとせり、況んや財産をや、

但し深密傳の内容につきては尚下に時々論及する所に就て之を詳かにせられんことを望む、

(註)　深密傳は多くは富木五郎といふ名士の手に成りたる由該傳其物にも見え又其奥書にも見ゆること本章に粗説きたりしが、日蓮宗正統派の小川氏が日蓮眞實傳に記したる富木氏の小傳に徴するも亦富木氏の手許に日蓮の秘書多く遺存せしこと知らる可けん、深密傳是に於て乎愈よ趣味多き者となる也、

『富木播磨守胤繼は、性來書を讀ことを好んで、篤く佛乘を信じ、日蓮大士いまだ蓮長たりし時より衣食資財を見繼て、學問修行をはげまし給へり、實に末法萬年宗門第一の大檀那なり、是をもつて「日蓮もし上行の再誕ならば、富木殿は無邊行なるべし、火を盛にするものは風なり」と遊ばしたるは此ゆゑなりけり、百座説法の道場は寺と成て正中山妙法華經寺と名づけ、大士手づから彫刻ありし一尊四菩薩および鬼子母神を建て本尊とし、大士を開山とす、富木胤繼は建治二年の夏、身延山に登り、大士の御手を勞して剃髪し、名を常修院日常と命ず、又常忍と號す、大士入滅の後、初て袈裟をかけて、中山第二世を繼げり、大士御在世の時、かねて此人の志の堅固なるを知召て、一切の書類は多く此家へ傳給ひしゆゑ、今此山に納る處、高祖の直筆一百餘通に及ぶ、盡未來門外不出と定め、今猶其掟を護る也、日蓮在世の時より、六老中老ともに富木殿を敬ひ見ること大士にかはらず、日常師正安元年己亥三月廿日、八十四歳にして示寂す、中山三代は日高四代は日祐聖人なり、此人は當國佐倉の城主千葉大隅守貞胤の子なり、これに依て佐倉より當山に寺領一萬石を寄附す、これより寺門盛になりゆき、關東關西末山末寺五千七百餘ヶ寺におよび、今に連綿として日常聖人の餘光宗門にかゞやくこと仰で尊び俯て信ずべし』

云ふ、日蓮大士は身延山久遠寺開堂の後、富木氏の舊恩を忘れじとて、富木氏の像を手づから刻みつ、己が傍らに安置して、朝夕之に尊禮を施こしたりと、之に應へて富木常忍師もまた日蓮の像を刻みて、毎日これを禮拜したりき、是は交互の尊像とて、永く傳はれりとぞ、

第五章　宗教家としての日蓮

第三章に論及せし如く、日蓮は誠に善巧方便を布教の要訣と爲したり、普通に信ぜらるゝ所に依れば、釋迦は大乘圓教の妙理を最後に顯はし示さんが爲にとて、先づ權謀として四十二年間阿含方等等の諸小中乘教を演説したりと云へば、天下の大方便豈之に若く者あらんや、方便は實に佛教の根本教略にてありき、只之を用ふるに緩急厚薄の差ある而已、釋迦の所謂る方便は釋迦其人は或は與かり知らざらんと雖も、後世に於る佛徒の方便は滔々として皆然りき、夫の稱名念佛なる者も亦是れ方便に非ずや、然り、大方便なり、方便とは梵語なり、支那に音翻して漚和倶舎羅と書す、英字

に書替ふれば Upayakausalya と成るべし、英語には之を Skilfulness と譯せり、其義餘り淺きに失するに似たり、ウパヤカウシヤリヤとは權宜の類なり、之を方便と名くるは方は法にて、卽ち正行を佐くる便法の義なりとす、佛者は此方便を種々に應用して內外六方便など云ふ者を立てたり、曰く(一)慈悲顧戀、(二)了知諸行、(三)欣佛妙智、(四)不捨生死、(五)輪廻不染、(六)猛然精進、是を內の六方便と爲す、但し釋迦牟尼が聽者の根の上下利鈍に應じて說法したる如きは、之を方便善巧(此ウパヤカウシヤリヤを然か譯す)と稱し、又如來方便智(ウパヤブラヂナと云ふ)と稱す、經(智印)に曰く、

『八諦四諦明眞俗、　亦名如來方便智、
譬如醫師治諸病、　隨病處方無執着、』

龍樹菩薩中論に說て曰く、

『若し諸の心行滅し、言語道斷なば、如何してか人をして諸法實相の理を知らしむべき、答て曰く、諸佛の無量方便これを爲す也、諸法は決定相なし、衆生を度せんが爲めに、或は一切實と說き、或は一切不實と說き、或は一切非實非不實と說くのみ、』

此の如く方便は佛法の警語となり了れり、釋迦牟尼の方便若し然か最も無礙なりしならば、日蓮大士の方便は極めて大膽なる者にてありき、而して其成功の一大原因は眞に此に存せり、日蓮宗六千の大小伽藍は此の一方便裏より生れ出でたりと云ふも過言に非ず、方便の妙用亦大なる乎哉！法華經第二なる方便品といふは卽ち此梵語(ウパヤカウシヤリヤ)を然か飜譯したる者と知る可し、

深密傳（深密とは元と佛典の名に在りし語也）の教相分別章に曰く、

『或時駿河三澤氏某高祖に問て曰く、昔年承りし御説と當今承る御説と一致ならず聞ゆる處あり、其故は先に讃歎し玉ひ後には又破り玉ひし儀あり、始に破て終りに讃し給ふ御説あり、紛々として其理悟り難し、願くは其理りを分明に了知するの御説を承らんと願ひけり、高祖曰く吾門所説に於て佐渡以前と大同小異あり、佐渡以前を方便門とし、佐渡以後を眞實門とす、然れども説處は前には讃して後には破し、或は始めに破して終に讃する事あり、是唯顯と密と也、故に時によりて人によりて相違す、是則佛教也、大乘小乘顯教密教の方便を説き、門下に連なる法子となるものには大乘方便を説き、密法教皆傳の上に於ては、大乘眞實を説き、佛の大乘小乘と其説相違すと雖ども、其理又同じ、これ吾門一家の法則也、後世に至るまで之を模範とすべしと遺訓まし〳〵けり』

ジョセフ、スミス暴徒に殺され、俊豪ブリガム、ヤング推れて管長となるや、一種少數の信徒は他に第三四流の某を推して己が頭に戴だき、ユタへ退去するを好まず、分離して別に教會を組織せり、是に至りて麼兒門教は忽ち二派に別れて、多少の軋轢は遺憾ながら早や免かれ難くなりぬ、

是の如く日蓮も自然の勢として既に己に佐渡行以前と以後とに方便眞實の區別を立てたるが故に、日蓮の滅度後忽ち身延山には管理上及び教理上早や分裂の端緒は開かれたり、何等の遺憾！

日蓮の入寂するや、六老僧遺命に由て身延山に輪番守護をなして有りけるが、七八年の後忽ち六老僧の一人日興上人は他の五老と意見合はず、遂に去りて房州に隱れ、其結果として勝劣派といふ者起りぬ、而して之に對する一致派なる

者身延池上等を中心として組織せられ、次で妙滿寺派も亦現出するに至りぬ、是れ固より活氣の充實せるより生ぜし現象なれども、亦歎かはしからずとせん耶、

但し第三章に論及せし如く日蓮は妙法蓮華經を以て釋迦最後の開權顯實的（方便を廢し眞實を顯はしたる）妙法門と爲したるが故に、自餘の諸宗を悉く方便教若くは權教（かりのをしへ）として排闢するに決心し、法華弘通の爲には如何に狡猾なる方便、又は如何に大膽なる手段を用ふるも敢て憚らず、肯て辭せざりき、固より法華經を妙典と深く信じて、己が身命をさへ之に獻げゐたれば、他人の身命財産をも亦法華弘通の爲には犧牲にするを意とせざりし也、彼は一切の處置運動を悉とく善巧方便の變體と見做せり、

深密傳第十四、弘通智略章に曰く、

『高祖御物語りに曰夫れ弘法傳教法然等普く賞譽せらるゝは一時の榮なり、然れども、是等は時機を知て人を計ることを知らざるものなり、學解は勝ると雖ども、遠き慮なし、吾門は人機を計ることを本とするが故に、彼等が教化と同うすべからず、今夫れ世上を見るに、智者は少く愚者は多し、唯だ佛經の如きは菩提心を第一として、教ゆるときは、智者は信ずと雖ども、愚者は信せず、惟るに、智者は千百中に一二に過ぎず、然れば如法に弘通せば、信ずるもの千百中に一二ならんか、方便を本とし、唯現世一旦の榮花を稱へ、或は幻法を修して、猥りに其利益を見せしむるときは、智者は信せずと雖ども、愚者は信ずべし、然れば信せざるもの千百中に一二ならんとす、末世に至るに從ひて、蓋し安からん、故に吾宗に引入せんと欲するときは、先づよく其人の情性を察して、或は病ましめ或は煩はしめて、而る後に先題目を勸めて念佛を廢せしむべし、此時に至りて其病を愉快ならしめば、遂にはなどか此妙法の道に歸せざらんや、一時苦しましむるは罪なるに

似たれども、後に法華を受持せしむる功德は又更に大也、故に前に苦ましめ後に樂ましむ、是吾門の慈悲とする所なり、此故に如此して弘通せば、終に海内悉く妙法の世となるべし、遺弟此言を忽にすること勿れと、嚴制ましく〳〵けり、努々語るべからず顯すべからず、吾宗の大法傳受のもの、これを覺悟すべしとの玉ひけり、可秘、』

是固より文字の如く渾淪呑下すべき者に非ず、大體の精神をとらば可ならんと雖ども、其慧眼は實に炬の如き者あり、是れ決して世間を瞞着する者に非ず、妙法てふ無價の重寶己れの手に在ることを固く信じ、而して此の重寶を授けんとするに世人受けざるが、故に、非常手段を施こしても之を受領しめんと工夫せる而已、例へば親が其否がる愛兒に必要の良藥を服せしめん爲めに百方虛僞若くは强暴の策略を施こすが如し、決して瞞着すとは謂ふべからず、寧ろ熱誠を之に盡す者と稱すべし、只日蓮のは往々劇だしきに過る嫌あるが如きを遺憾とする而已、廢邪立正章に曰く、

『高祖流刑の御身たりしとき消息して清澄寺の道善坊を訊問し玉ひけり、道善其の誠意を感じ副元帥平時宗公に歎願して、流刑の赦牒を申受、其時日朗使者たり、即ち之を持して長途を厭はず、晝夜を不捨、三月八日佐州に着し、高祖に此旨を申に、高祖甦生の思ひをなして、歡喜かぎりなし、遠く師坊の方に向ひて三拜九拜して其仁慈を謝し玉ふ、傳へ聞く、古來より此島の流人免助あることなし、念ふに今吾れ之を赦免せらるゝは是れ師の恩致なりと雖ども、且妙法弘通の前表かと隨喜身に流徧して、再び大志を企て玉ひ、阿佛坊日興等に命じて、此度本間氏と計り、火工具を用ひて先年鎌倉にて行ひ給ひし如くにして此地の堂社を毀んと、先空海が勸請の社廟或は淨家の堂宇等都て七ヶ所を今時衆民の尊崇する所を撰んで、深夜に

至り密に件のことを謀て、十三日首途し給ひけるに、即日堂社悉く燒亡す、高祖途に居て此餘煙を見給ひ、快然として曰く、吁妙法弘通の妨げなき識るべき也、然れども他宗の賊之を吾等の所爲と知らば又た憤逆して怨んで何事かなさん、可秘々々、然れども莠草を耘らずんば田苗實らず、餘宗を廢せずんば妙法弘まらず、眞宗念佛等の邪宗の堂坊を毀ち邪神の宮祠を燒くは正しく世尊への忠誠衆生濟度の善巧なりと、御教諭まし〳〵けり、高祖の深意を知らざれば一應不可なるに似たりと雖ども、祖は是薩埵の應現なり、是非は凡夫の計知る所にあらず、唯々仰くべきのみ、然れども未學未熟の儕はたとひ我門侶たりと雖も堅く秘して語べからず、何ぞ況んや其餘に於てをや、此條殊に秘すべきなりと嚴戒まし〳〵けり、』

讀者或は此章を見て、其手段の餘りに非常なるに駭かんと雖も、――此記事の確否は姑く措き、――我等は當時如何に日蓮が痛く迫害せられたるかを稽へ見るを要す、日蓮は（前に述し如く）經文および預言に徵して、今日は法華日本に弘通るべき機運熟せりと確信して、大決心を以て八軸を說き弘めつゝあるに、奇怪なる哉、四宗八宗の信徒および鎌倉將軍を始め諸國の權官競ふて日蓮を迫害し、伊豆へ謫し、小松原に襲ひ、松葉が谷に燒き、龍の口に斬らんとし、果は遠き佐渡が島へ流すなど、攻擊到らざる無かりしかば、日蓮も法華經の忠臣として之に應ずる非常手段を施したりしは、固より當然の事と申すべき而已、且又第八章に詳說せんとするが如く、日蓮は當時天災地殃頻りなるに考へて、鎌倉政府の存立を不正當視したれば、其之を倒して日本國を泰山の安きに還さんとの希望充ち滿ちたるや疑ふべからず、實に日蓮は預て竊かに戰術を學び、兵學を修めたりしかば、布教の

法方に往々軍略を使用し、且其身には法衣の下に常に相州の名作たる一尺二寸の利剣を帶びて自ら護り（此名刀は身延山の寶物とせられき）又後には恒に劍客を從がへて不虞に備へたり、是れ池上本門寺の如き慈悲忍辱の靈場に大刀の奉納せられたる者ある所以なりとす、例へば夫の大鼓の如き者は眞に進擊の軍樂に外ならざりき、鐘。鼓。進。退。章に曰く、

『高祖云一遍鐘を鳴して、念佛を弘るが故に、吾は是にひるがへりて、鼓を打ちて題目を唱へ進む也、抑も戰法に於て大鼓は進むの具なり、鐘は退くの器なり、吾れ鼓を打て進むの本意は諸法に魁けして此一宗を興隆せんが爲めの表示なり、』

實に日蓮宗は戰鬪宗にてありき、其題目を高唱するは恰も軍歌を高らかに謠ふが如し、軍歌朗々擊鼓鼕々、嗚呼何ぞ其れ勇壯なるや、想ふに、若し日蓮をして兵馬の家に生れしめたらんには、必ず一種の秀吉を逆現（あらかじめあらは）したるならん、何ぞ由井正雪の如き失敗を演出せんや、カーライル曰く、英雄は孰（いづ）れも英雄なれば、彼此地を易へても亦必ず英雄たらん、ダンテは亦大政治家たるを得べく、シエークスピーアルは亦大名將たるを得べく、ナポレオンは亦大詩人たるを得べけんと、純理を論ずれば必ず然るべき者とす、例外は何物にも何事にも之を見んことを期せざる可らざる也、

實に日蓮は幼時屢大言して、天下に號令せんとの志を吐けり、衆其大志を嘲りて曰く、童や汝敢て天下を望むと申すや、をこがましと、神童章に此事を記して云く、

『夫れ今天下鎌倉に將軍ありて是を掌握し王ふ、先之を亡さずんば汝大將たるを得んや、其將軍は隨身數萬あれば、是を伐んこと甚だ難し、然らば汝大將たらんと欲するとも一世に及ぶべからずと、人々笑ひけるを、善吉曰愚なる哉、大將軍を伐んこと何の難きか是れあらん、衆曰如何して伐ぞや、善吉曰烈風の時風上に至り放火し、其居館を燒かば將軍卽ち退居せん、其退路に埋伏せしめ、是れを伐たば數萬の兵士ありともいかでか救ふことを能せん、然れども是は唯伐つのみにして、天下の人を歸服せしむるに至らず、天下の人に歸せられずんば事成就することなしと傳聞す、今の將軍は流刑の身より終に天下の將となれり、他なし人和を得たればなり、吾當世の人氣を見るに、唯奇怪を好んで、正直を尊ばず、此時に當て衆を歸服せしむるには奇術に若くはなし、故に我常に是れを思惟すとの王ふ、衆人其高才を感ずとぞ、』

此の口碑をして眞ならしめば、日蓮が英才大志は政治界より轉じて宗教界に展びたりし者と謂はざる可らず、而して夫にしても尙日蓮の慧眼なる、夙に善巧方便の必要なるを看破してありき、故に曰く『今の時に當りてや、衆人を歸依せしむるには奇術に若く者なし』と、平凡なる手段は時人の注意を惹く能はじ、況んや之が歸依心服をや、但し妖術使用の有無に至りては次章に讓り、此に余輩は更に一歩を進めて、以て日蓮の三教合一的大方便を瞥見せんと欲す、

偖日蓮聖人は佛教内に在てや權實の穿議極めて嚴にして、他宗の存立は一切之を許さゞらんとの大決心を立て、彼の

有名なる四大格言（第七章を見よ）を剛膽にも敢然として天下に唱へたりとは雖ども、他教に對してや、卽ち儒道及び神道に對してや、――如何に其實併呑の方便なりとは云へ――或は温言柔語を以て調和を計り、或は低頭平身して教誨を受け、只管融合を維れ務め、遂に彼が如き一大雜種教をこそは造り出したれ、卽ち日蓮聖人は、儒教に向ひてや、清淨法行經といふが如き僞經を妄信して、

月光菩薩、彼稱顏回、光淨菩薩、彼稱老子、迦葉菩薩、彼稱孔子、

等と引證し、神道に向ひてや、同く又舊事紀といふが如き緯書を秖敬して、喋々倭姫皇女の傳へられたりと稱する託宣を援用する等、調和策至らざる無し、倭姫の託宣とは左の如し、

『各愼天無解正仁聞氣神代仁波人心皆清淨仁志天悉正直奈利故諸乃罪咎止云事更仁無志然仁地神乃末與利萬民其心黑烏志天根國底國仁吟是仁依天西天仁眞人有利天皇天仁代奉利機仁隨法於說彼詞將來故神明波託宣於止天如來仁讓利佛波神仁代天世仁出天法於說佛乃說教波神明乃託宣奈利枝葉花實乎以天根本於顯須故仁佛法東漸須』、

斯くて遂に其調製せる大曼荼羅中に、南無妙法蓮華經の七字の下に、左右に天照太神と八幡大菩薩を勸請（記入）し得んとして之を世に誇示する事と成りぬ、否な、更に一歩を進めて、啻に天照太神のみならず、春日大明神の如きをまでも釋迦の化現と說きなせり、其證として該宗徒が歌ふ所の者は

卽ち所謂春日の神詠なりとす、――

『我を知れ、釋迦牟尼佛、世に出て、玲瓏き月の世を照すとは』、

是より先き日蓮は比叡山に登りて傳敎大師の法流に積年の渴を潤ほさんと求めけるに、慈覺大師以來叡山痛く眞言化したりしを看破せしかば、深く慨きて措かず、法華再興の工夫に肝膽を碎きてありしが、不思議なる哉、一日に一柱、卽ち一月に三十柱の神（八幡春日等）隱に法華經を守護しつゝあるを發見し、遂に例の有名なる三十番神を法華經守護神と設け立つるに至りぬ、勿論三十番神出現の話は所謂善巧方便にして、神儒佛三敎を融合調和し以て法華弘通の用に供せる者なりき、故に番神示現章には實に左の如く此事を記述せり、

『建長元年巳酉高祖（二十八歲）比叡山に在て修學し給ひけるに、大衆皆な高祖の智德を稱して常光院に住持せしむ、抑も叡山に三塔あり、法水又た四に分る、一つに檀那流、二つに惠心流、三つに安海流、四つに安然流なり、此四流も敎ゆる處大同小異あり、皆な高祖の意にあらず、唯實のみにては弘通し難し、智證傳敎兩大師の說と雖ども、今時に至りては、猶舊年の曆の如くなれば、今之を改革して法を弘めなば却て法光を增さんかと思ひて、一山の大衆に敎命し給ひしかども、聞す、故に深く思惟して善巧方便を設け、大衆に告て曰く、三十番神順次に出現して告て曰、汝は是元と化上行菩薩の化身なり、今此國の佛法甚だ穢れたり、願くは之を變革すべしと告げまし〳〵けり、依て吾思ふに今時念佛、禪法、眞言、律宗等皆佛神の心に協はざるが故に、是等の宗旨を悉く掃除して妙法を弘通せよとの告命ならんと、大衆に語りけるに、大衆皆吾が言を用ひず、剩へ嘲て云ふ、番神正く出現して、如此の義を告命し給ふものならば、何ぞ一山の法主に告げ給はざるや、且つ公の外にも大德のなきにしもあらず、然るに他に告げずして公一人に告命

すとは何ぞやと、曾て疑情を懷きて信ぜざるが故に、吾秘計空くなりぬ、」

勿論番神問答記、報恩鈔等の正傳には三十番神眞箇に現出したりと主張す、然れども今日誰か之を眞面目に信受せんや、寧ろ深密傳の所說却て幾分か信を置くに足る也、殊に況んや當時叡山に行なはれたる四派の別流に論及せる所着々事實に符合するに於てをや、

按ずるに、日蓮師は先づ眞言寺に僧となり、後比叡山に登りて法華の餘波を尋ね、高野山を攀ぢて密宗の奥義を詢ひ、冷泉家を訪ひて歌道の敎訓を受け、吉田兼益を師として神道を學び、全く學に常師なかりしかば、單に八宗兼學のみならず、又內典外典徧く究め盡してありき、(吉田兼益曰く、弘長元年二月九日法華之行者日蓮法師入來此人……顯學無雙の人也、)而して此の廣大なる知識に加ふるに奇策橫生する善巧方便を以てしたれば、四面楚歌の中に在て能く百難を排し、千辛萬苦の後遂に天地を震撼する凱歌をこそ高らかに奏するを得たるなりけれ、

勿論日蓮は神道の神々を先づ悉く佛化し、然る後之を採用せり、而して其神々には本地と垂跡とを立てたり、例へば八幡大菩薩の本地は釋迦佛にして、釋迦佛が跡を日本に垂れたるは八幡大菩薩なりと云ふが如し、固より此種の兩部的神道は由て來れる久し、日蓮の創製に非ず、吉田兼益ト部兼邦等の神道家既に之を唱へ出せり、日蓮は又種々の神々は法華弘通を贊助すと揚言せり、而して是には種々一見憑據となるが如き者ありて存せり、神宮雜事記に曰く、『聖武皇帝

雖有伽藍建立之叡願猶恐神國之遺法天平十四年仰行基菩薩伺其効驗爰行基菩薩參籠太神宮祈請之神告曰實相眞如日輪照生死長夜闇本有常住月輪拂無明煩惱之雲我今逢難遭大願如渡得船是また吉田兼延が唯一神道論に說ける所なり、日蓮は此實相眞如等を以て法華經を指す者と解き做せり、曰く是れ方便品の義なり、壽量品の意也と、其外八幡加茂春日等に於けるも皆此傳なりき、嗚呼日蓮が一切を悉く利用して法華弘通廣布に供せる善巧方便も、亦恐るしい乎哉！

但し本章は自然に第七章と關聯して讀むを要す、是れ該章には四箇格言を大いに論ぜんとすれば也、

第六章　妖術と奇蹟——日蓮と伴天連

按ずるに、妖術若くは魔法とは多くは其方法の了らざる奇術を謂へる者のみ、昔し小銃の始めて薩摩の種が島に渡來せるや、時人これを魔法と呼びなしたりとぞ、若し今日の寫眞術（撮影術）、電信機、蓄音器、X光線をして二三百年前に我國に來らしめたらば、是亦均しく妖術と稱せられたりしなるべし、故に古代の大哲人は諸國とも多くは魔術師と呼ばれ來りぬ、ペルシア國の古哲輩は特に魔術師又は法術師と稱せられたり、埃及の哲人も古は然りき、彼等は必ず眞に妖術を行なひしに非ず、只其知識時俗に超えて、一見不可思議なるが如き事どもを能く行ひたれば也、

是の如く三百年イスパニア人等布教の爲に我國に來れるや、忽ち神術を有する者と認められ、一たび名聲を損ずるや、愚民を惑はす妖術師と言ひ觸されたり、是を以て切支丹伴天連とは魔術師の異名たるが如く見做れ來れるぞ奇怪なる、其實、今は誰も知る如く、切支丹とは基督教の謂、また伴天連とはPater（父の義）若くはPadre（亦父の義にて斯班牙語なり）の義にて、卽ち全く今日の所謂神父（天主教にては宣教師牧師などを神父と呼ぶ）に當る者とす、只彼等西洋の比較的進める知識を懷いて日本に來りしが故に、然か魔法師視せられたる而已、勿論彼等が布教の方便に其物理上及び醫術上に於ける知識を衒ひ示したるは爭そふ可らざる也、

切支丹來朝記に依れば、南蠻國は道術を以て日本を懷け取る可しとて、妖術勝れたる宇留岸伴天連に七種の珍物を齎らして來朝せしむ、第一は七十里一目に見ゆる遠目鏡、第二は芥子粒の如きを見る近目鏡、第三は虎の皮、第四は四十五丈當て碎く風鐵砲、第五は伽羅百斤、第六は八疊釣の蚊帳にて疊めば一寸八分の箱に納まる者、第七はコンダッとて紫金にて作れる四十二粒の南蠻珠數なりと、此等の器具も多くは我に珍らしき者なりけらし、此外彼等は物理及び醫術の領分に於て最も當時の人々を驚歎せしめたりと見ゆ、然ればにや南蠻寺附屬として近江の伊吹山に五十町四方の地を切ひらきて其持ち參れる許多の藥草を植つけたりと稱す、其醫術が布教の一大便宜と爲りたりしも明らかなるべし、曰く——

「南蠻寺へは難病人續々來りて治療を受け、皆速かに愈えければ、平癒者の勸告に由て宗門に入る者夥だし、病の癒えたる人々の中利根發明なる者三人寺にとめおく一人は生國加賀國禪僧にて惡僧といふもの彼は癩病にて見苦しく人交も雖成生國を出て乞食非人の體となり都に登り迷ひ眞葛ヶ原に倒れ伏し命も消

々なる所に南蠻寺に連行て伊留滿か療治を施しければ次第に本復して終に元の姿と成是に因て彼宗門に歸依し名をパビマンと改む又一人は泉州の町人矣服屋安左衛門とて人に名を知られたる者なりしが家業を餘所にして遊樂を好み遊女傾城に身をやつし終に身上をしまひ處の住居なりがたく乞食非人の身となり剩へ淫婬を煩ひ爰かしこと迷ひ歩行人の餘物を食ひ命を繋ぎ居りし者今一人は是も和泉國黒田村百姓善五郎といふもの其以前は富貴なりしが博奕且は遊女を好みいつしか貶しき身となりて淫婬を煩ひ見苦しく成て人にも嫌はれ處の住居も面目なく終に京へ登り東寺の邊を徘徊しけるが或時東寺の回廊の下にて同國安左衛門に逢互に顔を見合恥しくおもへども近く寄て昔を語り安からぬ身の成行を悔み日を送りける所へ南蠻寺より兩人を連行二人とも に病ないやし衣服をもらい美食にあき名を改めて安左衛門をゴウスモウ善五郎をジュンモンと名づけ以上三人を南蠻寺の同宿となし兩破天連毎度白洲へ連行陀羅尼を唱へ奇術を敎へける手拭を以て馬となし塵を取て鳥となし枯木に花を咲せ土塊を寶珠とし或は虛空に坐し地に沈み又雲を起し雨雪を降し種々の術を敎へけるに後には此三人不思儀の術をなし夫々に勸ける此内ゴウスモウ及ジュンモンの二人は宗門破滅の後泉州堺に住して術をなし秀吉公の召に依て伏見の城にて奇術をなし終に罪科に行る其外全快の者を南人に仕立種々の方便を回らし洛中洛外はいふに及ばす近國までも出し南蠻寺の御慈悲には伊留滿といふ外科本道の名醫ありて難病難治のものを悉く療治せしめ一人として愈ざるはなし然かれども藥代としては一錢も取たまはず療治の間は寺に て扶持をなされ貧しき者には宿の妻子までも金銀を下され誠に大慈悲あり即身成佛の宗旨は是なり早々宗旨を改め耶蘇宗門となりたまへと勸め歩きけり」云々

此中「伏見の城にて奇術を爲し終に罪科に行なはる」とは、是れ秀吉公の嘗て手討にせられし妾菊の幽靈を出して、逆鱗に觸れ殺されたりと云ふ話を指せる者とす、皆信を措くに足らず、

是の如く由井正雪もまた切支丹黨の策師森宗意軒より此種の妖術を授かりて、紀州に江戸に屢々衆人の視聽を愕ろかしたりと稱す、皆是同日の論のみ、己の知らざる行爲を奇とし妖とするにこそ、

考へて玆に至るや余輩は日蓮大士の烱眼に感ぜざるを得

ず、古今人情は奇を喜ぶが故に、人目を牽くは奇を弄するに若く無し、前章に引ける如く、日蓮は少時より既に奇術の百事に必要なるを看破したり、曰く『今の時に當りて、衆を歸服せしむるは奇術に若く者なし』と、深密傳には此の慧眼を讃歎して曰く、『是より高祖時々食を以て山野に行き、狐窟を見れば是を與へ玉ふて、遂に彼兩狐に逢ひ、是より妙術を得るに至る（彼兩狐は妙太郎法太郎是れなり高祖一生涯の間常に奉仕供給し甚だ奇功あり）、是れに依て名を天下に擧げ玉ふ、實に栴檀は二葉より香しと、宜なる哉、高祖稚幼如是大賢大聖なる誠に妙法弘通の法器なること最も尊むべし、』日蓮は、果して狐を使ひたるや否やは疑問なれども、彼が狐を使ふといふ評判を立てられし事は眞に近し、是れ卽ち第四章に論及せし富木五郎心配の件にして、狐を猿に言ひ紛らさんとは爲しつる者とす、

接ずるに、狐を使ふといふ事は獨り日蓮大士に限らず、今日までも、屢々奇術家につきて言ひ觸らされたる事なる而已ならず、狐は稻荷大明神の御使と世に稱する位なれば、狐を使ふといふとも恐らくはさのみ大惡事とも見做されざりしならん歟、只之を惡手段に用ふるを忌む而已、妙法神驗章に曰く、

『或時高祖松葉谷の庵室に在して、竊に門下の道俗を召して他の邪宗を弘むる者を襲伐たんことを謀り給ふに、姦賊之を聞て集り議して曰、日蓮が徒今吾等宗旨を伐たんことを謀る、いざ逆に責て之を伐てと、大に怒り罵て高祖の庵室に至らんとす、時に二神（妙法）疾走り來り、此大事を告る故に、高祖之を避て傍の巖窟の中に隱れ給ふ、時奸賊共襲ひ來り、丈室を見るに、高

祖居玉はず、邪徒等大聲罵て丈室を燒て歸る、高祖深蟄して巖窟に居ること、數日出て富木五郎が家に至りて客たりし時、富木五郎問て云、公巖窟に閉居し玉ふ砌りは何をか食し給ふ、高祖曰吾巖窟にあるや野干來りて食を供せしとなりと、有の儘に語り給ふに、五郎其嗜を感心すと云々、此頃門下の徒傳て曰ふ高祖に食を送りしは稲荷の仕送りなりと、』

此事を正統傳には白猿來りて大士を東なる山王堂の奥まりたる洞窟の中に案内すと書す、是卽ち富木氏が所謂猿畠云々の話と符合す、但し日蓮は小松原に於る横難眉間負傷の時にも、又叡山に於る番神狂言の際にも、此等二狐が怖れて走り去りて毫も用をなさゞりしを咲やけり、

之を要するに、例の二狐は果して獸なりしか、又は人なりしか、又は日蓮の靈心なりしか、猶未決の疑問に屬す、而して日蓮が雨を降らす、病を癒す等幾度か奇蹟を顯はしたりと傳ふる如きは、是れ信力又は德力の能く爲し得る者なれば、强ち悉く疑ひ排ぞくるを要せじ、是れジョセフ、スミスが嘗て爲したる所なり、ダウヰが今現に爲しをる所なり、元と信仰療法、催眠療法等と其理を同じうす、但し龍の口の御難なる者に至りては、深密傳に其助命の眞原因を特記せり、夫の刀の折れたりと云ふが如きは、法華經普門品なる「刀尋段々壞」を附會したる者のみ、

『我先年囚となりしとき、密に法子を道隆の許に遣し、官府の救を申し乞ひ給はんことをねんごろに乞ふ、道隆いなまず諾す、既にその日になりければ吾は馬に騎せられて街道を巡り、龍の口に赴くに、途中に河あり、道隆この所に疾く來て、吾を待ち、相逢(後この處を呼て行逢川と云)馬の口を取て、自ら相隨て龍

の口に至り、衆卒に云て曰夫禽獸たりとも、其生を見ては其死を見るに不忍、其聲を聞て其肉を喰ふに不忍、今此法子罪ありと雖とも、未だ禽獸にはあらず、何ぞそれ死地に臨を見て、吾之を捨んや、愚僧が身にかへて此を赦せよ、若吾言を不用は、先吾より先に誅せよと云て坐す（此道隆は北條家師依の僧ゆゑ威あり）創士も如何ともすること不能、衆士集り議て、遂に是を公門に奏す、君公此諫を聞き、赦狀を下す、道隆遂に我をともなひて歸寺す、經に曰く若し人刀狀瓦石を加へんと欲せば、化人を使はして之が爲に衛護を作すべしと、說玉ひける、今此變化の人とは、則道隆なり、此時若し我を助けずんは道隆も天魔となるべきに、吾を助けんと思ふ心起りしに依りて忽ちに佛の慈悲心道隆が身に入りしなり、吁嗟これ道隆が圖らず此の功德を得たるこそ誠に聞法の幸慶なるものなれ、』

兎に角日蓮の大智なりしことは察するに餘あり、友人某氏日蓮秘藏の明鏡といふを有す、其明鏡は太陽に向くるや忽ち南無妙法蓮華經の七字を其鏡面に現ず、今細かに査べ見れば、是全く巧に此等の七字を別製の鐵にて嵌入したる者の如しとぞ、何等の機智ぞよ！

（註）正統傳に喋々せらるゝ『明星依智に降りて高祖を擁護せる』一條につきては、固より星辰が庭園の樹に降り掛るべき謂なし、星若し降らば此世は壞滅せん、方便引導章に曰く、

『高祖曰抑も人を敎導せんと欲するに、念佛宗の如く只道理にのみ偏る可らず、道理を辨ふるもの稀なればなり、又眞實によるべからず、眞實を尊むもの少ければなり、凡そ人は奇を好み怪きに走ること、戲兒の傀儡師を追ふが如し、昔し吾相州愛甲郡依智の鄕に在て、（時五月晦日）世の人の賢愚を慮り見る爲めに夜る庭前に出て、法樂し天を仰て呼て、曰吾妙法を弘通する連年珍菩多し、月天子如何々々と呼て、空中を見るに此時彼妙術を以て庭前の梅樹に衆星を連て見せしむ、須臾に吾獨語す此時に本間重連吾に向て

曰、庭前梅枝に花の如く點するもの何ぞや、吾答曰星なり、又問曰尊師獨り空を仰ぎ給ふことは何事ぞ、吾答て曰吾日月天子と問答するなり、吾月天子に告ることあり、之を呼ぶ、衆星忽ち降て如是梅樹に宿る、是れ吾凡夫にあらざるの證なりと、敎化せしに、重連父子大に感服し、尊敬して以て實に一衆星の降りしと思ひ、又た世人之を傳へ、各傳聞て今は全く實の事の如く世上に云もの多し、可思、夫れ日月星辰は經說を以て言んに、日の高さ四萬由旬（一由旬を三十里とす）也日の大きさ五十一由旬月の大きさ五十由旬星は一由旬乃至半由旬なり、此土の里數を以て云はゞ小星と雖とも、周圍三四十里程ならん、何ぞ花の如く梅樹に點ずべきや、然れども無智の凡俗は却て如是く理に合はざることに非れば信せず、云々』

最後に尙一言せんに、人或は問ふて曰ん、然らば日蓮大士の正統傳記には何が故に然か神力奇蹟等充ち滿ちたるぞや、曰く病を癒す、曰く刀を折る、曰く雨を降らす、曰く何、曰く何、何ぞ其れ虛飾の甚だ大なるや、答へて曰く、是は獨り日蓮に於て然るのみに非ず、各宗の祖師多くは皆然り、皆門弟子が其師德を追慕するの餘り、百事を理想化し、各件を誇張して、多くは玆に至らしむるものとす、但し日蓮宗に於ては、高祖日蓮特に此點に注意して、生前其高足弟子等に訓諭する所ありたりと云ふ、亦是れ善巧方便の一端なる耳、卽ち記文法則章中に諭して曰く、『或日御物語に曰、夫れ山水眺望の圖を畫するもの、花を畫くに蝶をそへ、畫に霜をそへる、是元より在るにあらざるにもせよ、之れを圖畫するに是其風景を增すの方便なり、强て虛僞と云ふにあらず、其物に付て其晴時を顯し、或は其勢景を顯さん爲なり、後世に至りて、若し吾傳を述作せんに又た心得あるべき哉と、仰せことありけり、倩

ら案ずるに、高祖は名利を好み給ふに非ずと雖ども、教法弘通の方便なれば、高祖の傳記を顯さんと欲せば、必ず先づ諸事を莊嚴して、末世の凡俗を引入すべし、夫れ只一旦の利益は、願人の心に依て生ずるものなれば、愚民等は經說の深義を辨へざる故に、只高祖の威法を飾らば、是を聞て人々妙法を信ずべし、是れ大尊師たるもの可有覺悟處なり、』

善巧方便の化身とは云へ、慧眼も亦非凡なる哉、日蓮宗が急速に傳播せる者亦大いに此方便に依らずんばあらず、南無妙法蓮華經の代りに我輩は南無妙方便と叫ばざるを得ざる也、

第七章　四箇格言と諸他の佛宗

去る明治廿三年の頃かとよ各宗の管長は相協議して、各宗綱要なる者を編纂せんと計れり、淨土眞宗の島地默雷、天台宗の蘆津實全、臨濟宗の進藤端堂、眞言宗の土岐法龍等の諸師其他若干は之が委員に擧げられたり、而して六七年の星霜を閲して後、遂に各宗綱要は二三册の書となりて現はれぬ。之を評するは他日の業とせんも玆に一事の世を驚かせつゝある者あるは掩ふ可らず。他なし、日蓮宗内の派中に妙滿寺派と稱する者あり、興門派、本成寺派等自餘の他派が特に遠慮して差控へたるに激してか改めて例の「四箇格言」を呈出しつ、飽までも其が該綱要中に挿入せられんことを主

張して止まず、委員が之を以て他宗の存立に害ありとして省略し去るや、其不當を鳴らして之を世間の法庭に訟たへたり、而して法庭は紙數の規定外に殖るを避んために之を略せりてふ被告の陳述を採りて、妙滿寺派の敗訴とは成したりと云ふ。

爾後該訴訟は如何に落着せしや知らずと雖ども、妙滿寺派の如きは、高祖の强硬は之を嗣ぎたれども、日蓮の變通と方便とは之を得ざる者に似たり、如何となれば四箇格言なる者は、日蓮が始て其宗旨を弘むる創業の時にこそ極めて必要なる者なりけれ、守成の今日に於ては徒らに紛爭の種とならん而已にして、毫も利益する所なかる可ければ也、但し其理は下に尙論ぜん事として、今聊か四箇格言の由來を講究せんと欲す、

我が佛敎界に堂々と各々一旗旆を樹たる諸門派中に在てや日蓮宗を以て最も奇妙なる者とす。「奇、妙」の兩字たるや、其本義に於ては申すまでも無く奇、異、奥、妙なるの謂にして、固より善き意味に用ふべき者なりと雖も、其が俗間に行はるゝの旨義に於ては稍奇、怪なるの謂にして、勿論惡き意味に使はるゝを常とする也。故に我輩は特に此形容詞を選びて之を日蓮宗に冠するを便利なるものと思惟せり、是れ此文字たる一擧にして該宗の性質の兩面を描き出せる者なるを以てなり。實に日蓮宗の物たるや、一面より之を眺むれば如何にも高遠深奥なるの觀ありと雖ども、他の一面(寧ろ他の各方面)より之を窺へば、人をして怪訝に堪ざらしむる者

一にして足らず、復も我輩をしてナポレオン第一世が口にしたりと稱する西諺の全たくは虚妄ならざるを、――否な却て大いに穿てる所あるを――感ぜしめずんばあらず、云く「高遠と癡狂とは相去る唯一歩のみ」と。按ずるに、凡そ宗教は多角的なる者なり、其中には多端の原則教義ありて存す、是に於てか世上には幾多の宗門あるを見る、是れ備はれるを一宗一門に望むべからざるを以てなり。故に宗教にして尚元氣の盛んならんか、宗教にして尚成長開發しつゝある者ならんか、必ずや茲に或る點までは千割萬判して數多の宗派を現出し來らんとす。是卽ち其宗教に具足する幾多の方面を箇々に代表し、別々に闡明し來る者なりとす。されば佛教にも幾多の宗派あるは毫も怪しむを須ひず、例へば天台宗は煩惱卽菩提、生死卽涅槃の教義を主として唱へ、禪宗は直指人心、見性成佛の原理を旨として談ずるが如き是なり。唯獨り佛教の爲に惜む者は其枝分の早くも已に日久しく俗に流れ、年を逐ふて愈々墮落の境界に腐敗し去れるに在りとす。

法體恒有毘曇宗　　麁假細實成實宗
五篇七聚戒律宗　　有空中道法相宗
八不中道三論宗　　三界唯心華嚴宗
六大無碍眞言宗　　一心三觀天台宗
直見眞性達磨宗　　一念十念淨土宗

是れ先哲が舊來の十大宗を詠じたる句なり、勿論此割判若くは開發たるや小乘より中乘、中乘より大乘と次第に闡發

し行ける者なりとは雖ども、全く是れ一歩は一歩と益々敎祖の意思に遠ざかり來れる者たるのみならず、達磨宗に於て其の一たび思辨工夫の絶頂に達せるや、宛から急坂に石を轉ばすが如く遽然として墜落の途に奔りつゝ、嘗て三十三天の上にまで高く揚げられたる者却つて奈落迦の底にまで墜ちんとす。彼の淨土宗と稱する者の如き、他力の信心を主張するに於てや、一見大いに悅ぶべき者なきに非ず、謂へらく、自力の宗徒が足を樗木にして長途を行き惱む中に他力の宗徒は十萬億土を彈指の間に往生すと。然りと雖ども、其他力を賴む所以の理由を覈へ來れば、喟然として心の底より長大息を發せざるを得ぬを奈ともする無し。法念上人の選擇集に曰く、

問曰、一切衆生皆有二佛性一……何因至今仍自輪二廻生死一而不レ出二火宅一。

答曰、依二大乘聖敎一良由レ不レ得二二種勝法一以排二生死一是以不レ出二火宅一。何者爲レ二、一謂聖道、二謂往生淨土、其聖道、一種今時難レ證。所以者何、一由レ去二大聖一遙遠、二由レ理深解微。是故經云、我末法時中、億々衆生起レ行修レ道、未レ有二一人得一之者。當今末法、現是五濁惡世（註伊を見よ）唯淨土一門可二通入一路。

或は兵部卿平基親が該書に序したる辭を借りて一層美文的に此理を稱揚すれば、

專稱南無之敎門者直至二西刹一之要路也、不二但釋迦金口之宣一亦爲二彌陀素意之願一、二日三日執二持名號一之證（註呂を見よ）、諸佛舒レ舌十聲一聲必得二往生一之義、衆生銘レ肝。

是に由て之を觀れば、末法期中（註波を見よ）に於てや到底眞正の佛道（所謂聖道）は修證せらる可らざる者にして、夫が爲に淨土論者は無造作の念佛三昧を衆生に勸むる者たるや、固より識者を俟たずして明らかなりとす。嗟佛子の倦るや已に久しかり、大乘の論歩愈々進んで、信徒の去就に惑ふや愈々深かり、斯の如き「アキリース」と「龜子」然たる虛辭劇談には安心立命を億兆に與るの望到底之れ有るべくも非ず、是に於て乎大乘論派中業に已に方便說若くは戲論の追々に叢生しつゝ在るありき。卽ち佛敎の開發たるや、今日の語を以て之を申せば、全く是れ不可識的、無神的、寂滅的方向に益々進みて底止する所を知らざりし者なるが故に、徹頭徹尾破壞的且消極的にして、人情と乖離するの甚きや快馬に鞭ちつゝ東西に背馳するに彷彿たりければ、生來信心に富める印度人などてか之に長く安んずべき、彼等が倦るの大いなるや早くも已に其胸裏には之が反動として衆多の偶像を造り出し來り、由て以て其腹中の希望を多神敎的に滿足し去らんと務むること甚だ急なりしかば、流石に詭劇なる大乘論者も最早消極の方面にのみ其力を逞しうする能はず、いつしか一轉して建設の方向に歩を着け始めしが、反動の大勢頗る猛激にして、殆ど知ず識ずの間に許多の戲論をば製造する事と成りぬ。されば有無の見を破して大乘の無上法を弘めたりと稱する大乘論者龍樹菩薩の如きも亦說きて曰く、

菩薩求二阿毘跋致一有二二種道一、一者難行道、二者易行道（註仁を見

と、其五濁惡世無佛の時に於て阿毘跋致を修むるの到底望なき所以を述べたり

馬鳴菩薩も亦其深奥を以て稱せらるゝ起信論――三界虚僞、唯心所作と闡明せる大乘論――に於て、同じく通俗的なる淨土門を初學者に開示して、曰く、――

當知如來有勝方便攝護信心、謂以專意念佛因緣隨願得生他方佛土、常見於佛故永離惡道、如修多羅說、若人專念西方極樂世界、阿彌陀佛所修善根廻向願求生彼世界即得往生、常見佛故、終無有退。

是卽ち後漢月支三藏支婁迦讖譯と稱する所謂佛說般舟三昧經に於て信心の堅固ならんことを勸むるに當りて說けるが如き精神を表出せる者なる而已、云く、

若有比丘比丘尼如法行、持戒完具、獨一處止、念西方阿彌陀佛今現在、隨所聞當念去此千億萬佛刹其國名須摩提、一心念之、一日一夜若七日七夜、過七日已後見之……佛言、菩薩於此間國土念阿彌陀佛、專念故得見之。卽問持何法得生此國。阿彌陀佛報言、欲來生者當念我名莫有休息則得來生。

否な、該經には更に此法を擴めて曰く、

如是欲得見十方諸現在佛者當一心念其方莫得異想、如是卽可得見……

但し斯の如き方法を以て見るを得べき佛陀は果して實物なるか、若くは虚假なる乎と問ふに、該般舟三昧經には卽ち

打明けて其幻影なるを說けり!!

佛從何所來、我爲到何處、自念佛、無所從來、我亦無所至、自念欲界色界是三處、意所作耳、我所念卽見。心作佛。心自見、

云々。

是の如き大救主たる阿彌陀佛は是れ小乘下根の人々が最も要する者とや謂はまし、然れども其實は之と反對にして、南部の佛敎、卽ち小乘敎には全く斯る佛陀ある無く、一に是れ後世の大乘敎徒が造り出したる者に係れり。されば亦是れ釋迦の得て與かり知らざりし者なるや論なき耳。北部の佛敎、卽ち大乘敎にても、此阿彌陀佛（註保を見よ）は初より然か尊き者には非ざりし也、最初は只西方淨土の一佛として群佛中に算へられし者なる而已、斯の如く日蓮上人が應兒視する法華經に於ては實に阿彌陀の由來を左の如く記るしたり、——

諸比丘、我今語汝、彼佛弟子十六沙彌今皆得無上正覺、於十方國土現在說法、有無量百千萬億菩薩聲聞以爲眷屬、其二沙彌東方作佛、一名阿閦在歡喜國、二名須彌頂、……西方二佛名阿彌陀、二名度一切世間苦惱……

是卽ち化城喩品の文字なりと知るべし。併し乍ら妙法蓮華經——薩達摩芬陀利伽蘇多覽——を著はせる當時に於てすらも阿彌陀禮拜は業に已に頗る進みてありしや疑を容るべからざる者ありて存す、隨て又該經の成りし年代の新しきをも間接に知り得べき歟、卽ち藥王品には明記して、曰く、——如來滅後、後五百歲中、（註邊を見よ）若有女人聞此經典如說

修行、於此命終、卽往安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處、生蓮華中寶座之上云々。已に斯の如くなれば淨土門の由て來れるものも亦久し、凝然大德の八宗綱要に於る如く、

淨土門源出於起信論

とは斷言すべきに非ざる也。

偖淨土門の念佛宗が由て來れる所大凡此の如し、是全く今の末法中に方便として敷くべき者なりと稱す。法念上人が之を我が國に弘めてより凡六十年の頃、右の凝然和尙は之を評して、曰く、近代已來此教特盛なりと。此時や親鸞も亦棺を蓋ふて、未だ日久からず、日蓮は尙盛んに法華宗を宣布しつゝありき。日蓮は今此等の教況を視て如何なる感をなせしぞや。彼念佛宗が純然たる大乘出身の宗義たるにも拘はらず、日蓮大士は之を目するに小乘下劣を以てしたり。我國のマホメットたる日蓮は毫も之を假借せざりき。法然上人が一切の雜行を去りて單に專ら阿彌陀佛を念ぜよと說けるを日蓮大士は痛く憤りて、思へらく、是れ經王たる法華を捨る者たり、所謂佛種を斷つ者たり、必や譬喩品中に見えたる如く無間地獄に墮んと、遂に阿房の淸澄に大喝して言く、念佛無間と。否な是と同一律に他の各宗をも排斥して曰く、禪宗は天魔の眷屬眞言宗は國を亡ぼすの邪法、律宗は經王を無する國賊のみ、諸宗は皆權敎にして得道なし、顯實の法華獨り之を得たりと。是卽ち有名なる四箇格言、謗法嚴誡の公然たる發表にして、是より日蓮のマホメットは天下を敵として、又天下に敵とせられて、勇戰奮鬪し、遂に法華弘通の

公許を時宗より賜はりて、積年の志を成就し得たり、曰く、

『念佛無間、　禪天魔、　眞言亡國、　律國賊、

他宗無得道、　法華獨成佛』

嗚呼何たる大斷言ぞよ、天台宗は勿論法華經を尊重したる者なりければ、此の排闢中には網羅せられざりき、

(註)(伊)五濁惡世、即ち劫濁(こふぢよく)、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁(みやうぢよく)是也、劫濁は人壽が最初の二萬歳より段々と減縮して、今日の狀に至れるを謂ふ、見濁は邪見妄計なり、煩惱濁は貪嗔癡等の諸煩惱を謂ふ、衆生濁は五陰假躰の果報を謂ひ、命濁とは身軀の刹那に消滅するを謂ふ。

(呂)二日三日執持名號之證、阿彌陀經に曰く、

舍利弗、若有善男子善女人聞說阿彌陀佛執持名號、若一日若二日若三日若四日若五日若六日若七日、一心不亂、專持名號、以稱名故諸罪消滅、即是多善根福德因緣、其人臨命終時、阿彌陀佛與諸聖衆現在其前、是人終時、心不顚倒、即得往生阿彌陀佛極樂國土、舍利弗我見是利、故說此言、若有衆生聞是說者應當發願生彼國土。

(波)末法期中、釋迦入滅後、一千年を正法期とし、次の一千年を像法期とし、其後の一萬年を末法期とす、末法問は方便に由らざれば得度する者なしと云ふ、(尙註邊を參觀せよ)。

(仁)阿毘跋致、また阿惟越致と書す、梵語なり、此には不退轉と翻す、涅槃解脫法身等を修證するを謂ふ。

(保)阿彌陀佛、諸佛中に是獨り尊とく成りて他を壓倒したるは、一は其名の殊勝なるに因由すと謂ふべし、アミダは無限無邊無量の義、アバアブ(ハ)は光明の義なり、故に阿彌陀經に曰く、

舍利弗於汝意云何、彼佛何故號阿彌陀、舍利弗彼佛光明無量照十方國無所障礙、是故號爲阿彌陀。

(邊)後五百年、大集月藏經に五箇の五百を立て、正法の千年と像法の千年とを總て以て四箇の五百と爲し、末法の初の五百年を以て第五の五百歳

と爲す、從來の計算に依れば、末法に入て百七十年に日蓮我が國に生れたるなり、而して如來滅後二千二百一年を以て一佛乘を弘めんと試みたりと云ふ。

（登）妙法蓮華經、南岳大師の法華懺法に云く、一心奉請南無妙法蓮華經云々――又傳敎大師修禪寺決に云く、臨終之時唱南無妙法蓮華經、則由妙法之功力速成菩提、令不受生死之身。――天台の曰く、於道場中敷好高座、安置法華一部、供施幡蓋種々供養具云々。病根は已に茲に存す、日蓮の野心勃々たる、只之を假りて以て親戀に拮抗せんと試みたる而已、

熟ら惟みるに、法華經は所謂る大乘經中の白眉と稱すべき者なるや疑を容れず、諸法實相の眞理なることを喋々するや至れり盡せり、法華方便品に曰く、『止みぬ舍利弗、復說くべからず、所以者何、佛が成就せる所は第一希有難解之法なり、唯佛と佛と能く諸法實相を究め盡したまふ』云々、然れども前章にも論及せし如く、法華經は只功能を說ける而已にして、眞理其物を說かざれば、之に由て究竟涅槃を修得する能はざる而已ならず、其大部分は授記品、功德品等の如く、戲論の塡充する所なるが故に、心ある讀者は諸法實相敎中然か方便の多きに失望せざるを得じ、然ば余輩は弘法大師が法華經を第三戲論と判斷したる眼識の明を稱讃せざる可らず、又法然上人が法華經を指して捨閉擱拋と諭せしも强ち謬妄と謂ふ可らず、是卽ち『捨よ、閉よ、擱けよ、拋てよ』と訓へたる者なりとす、是は俱に內容に稽がへて說を立てたる者にして、批評眼の乏しき時代に在ては見識頗る高しと謂はざる可らず、如何となれば諸法實相は名のみにして、毫も闡明せられざれば也、況や單に其題目を唱へたればとて何の

利益かあるべけん、勿論古くよりして法華の題目――南無妙法蓮華經――を唱ふることは則ち之有りき。先づ法華經其物の中には縷々之が功德を叙べて、寔に煩にたへず、曰く、又如衆星之中月天子最爲第一、此法華經亦復如是、於千萬億種諸經法中最照明。――若是善男子善女人我滅度能竊爲一人說法華經乃至一句、當知是人則如來使云々。――受持法華名者福不可量。――若聞此經宣持名號、德不可量。豈戲論ならずとせん乎。

（註）諸法實相とは權教を廢して眞實を敎へたるを謂ふ者にして、是れ佛智の境なり、但し諸法實相の四字は從來佛敎家が頻りに難々持難す語なれども、其實梵語にて然か一名稱に書き綴れる者にあらず、支那の翻譯者が自ら經意を斟みて作り設けたる稱呼なり、然るに佛敎學者が非常に長たらしき註釋を此四字の爲に書ける如きは寧ろ御苦勞の至りと謂はざる可らず、

但し法華經を盲信するに於ては實に日蓮の如く極端に奔らざらんとすとも能はざらん、佛告彌勒我今分明語汝、是人以一切樂具施於四百億無數世界六趣衆、又令得阿羅漢果、功德不如是第五十人聞法華經一偈隨喜功德、是れ隨喜功德品の語にあらずや、日蓮は博學ながらも、單に此等の功德談を盲信し、又は盲信する眞似したれば、勢ひ他宗を誹らざるを得ざりき、但し四箇格言の如き極めて激烈の字句を列ねたるは、是また方便にてありき、弘通の鼓舞に大鼓を採用せし如く、他宗排斥にも故らに大言壯語を用ひたる者とす、之を方便善巧とす、故に日乾尊者曰く、

『凡そ大小權實顯密等の諸經を謗るは吾が祖の意に非ず、三藏教最も劣なりと雖も、法華開會の說に據れば、本是一佛乘より出たる者なり、況や其餘の教をや、故に之を謗るは其過焉より大なる莫し、然りと雖も教に勝劣を辨じ、經に淺深を別ち、權を破り實を立て、三を廢し一を顯はすは、是れ私議に非ず、源は佛說より起り、流を天台の妙樂に挹む也』云々

否な、日蓮大士其人すらも既に自ら开が方便なることを說けりと云ふ、卽ち、深密傳念佛無間章に曰く、

『文永八辛未年十月廿八日高祖佐州に遷り、同く十一月朔日漸く塚原の里に、至り、一つの茅屋を占むと雖ども、蓬戸草堂唯雨露を凌ぐのみ、時哉末法弘教の大道師如此の勞を成し玉はんことはと、思ひ出るにも猶袖を絞らぬと云ふことなし、時に後山（塚原ヨリ三里程ト云フ處ロ）と云處あり、此地に阿佛坊と云ふものあり、元これ藤原朝臣入道爲盛の臣也、常に念佛を行ひ、數月の日課を修す、高祖塚原に在すことを聞き來て爭論をなさん事を乞ふ、吁々蟷螂の斧なる哉、高祖案內に應じて、相逢て坐す、其容儀恰も須彌山王の金台に坐するが如し、阿佛坊の曰く、吾れは是淨土宗也、仁の所說傳聞するに、頗る不審なきにあらず、依て其所立を聞んが爲めに來れり、抑も仁の所說念佛は無間の業と云へり、夫れ彌陀の本願は末世相應の要法也、諸經は然らず、時機不相應の教也、故に經に末法時中億々衆生起行修道未有一人得者と、釋迦兼て說き玉へり、然れば法華經等を以て祈らんも、末法今の時に當て必ず一人も成佛する者あるべからず、唯念佛一法のみ六方の如來も證誠し、三世の諸佛も贊歎し、一切諸天も擁護し玉ふと說玉へりと、云々、依て仁の尊む所の法華の元祖、天台大師も止觀の常行三昧文を釋て、曰若唱彌陀卽十方佛功德等とあり、但專ら以彌陀法門の主とし玉へり、故に善導大師只念佛を以て本勤とし玉へり、然るに其念佛を無間の業とそしるは何事ぞ

や、佛の經にも非らず、菩薩の誦にも非らず、先德の釋にも非らず、然れども全く念佛を無間の業と云や、高祖答曰然り、念佛は全く無間の業なり、余汝に問ことあり、抑汝が宗旨に於ては、全く今云如く念佛には無量の功德こもれり、諸善万行もこもれり、故に一切の佛菩薩等これを護念し玉ふといふことを眞と知るか、又僞と思へるや、阿佛坊答曰、是れ經論釋の上に於て明なり、何ぞ疑を容れんやと、高祖又問曰、汝が宗旨にては善導法然を實に貴むや、又僞に貴むや、阿佛坊答曰、夫善導大師法然上人は和漢の明師也、何ぞ僞り貴むの理あらんや、眞理なること勿論なりと、云けるとき、高祖は、はつたと手を打ち笑つて曰く、さて愈よ念佛宗は無間に墮すこと疑ひなし、僞飾宗旨なること哉、汝の云ふ處悉く是れ僞なり、其故は釋尊經に一向專念無量壽佛と說き、又は一向專念彌陀名號と釋す、一切善根は悉く名號にこもれりと說き玉へり、然るも疑ひなくば何ぞ念佛者にて餘行を勸むるの理あらんや、然るに此頃世上を見るに、念佛の行者好んで種々の苦行をなすもの多し、皆な是唯諸人の敬を受けん爲め、巧みの方便に出でたること

にて、本願の意にそむき經の義に違せり、然れば念佛の行者よりは、念佛の誹謗者なればこそ、無間には墮するなりと云へり、又善導法然を尊むと云も、是又僞なり其故は法然の撰擇集に、雜行雜修は捨よ唯一向に念佛すべしと述べ、淨土彌陀經の外は讀むも雜行なり、彌陀の外は拜するも雜行也、但專らに念佛を修すべし、さるにてこそ、釋迦彌陀の意にも叶ひ、諸天擁護し玉ふとは敎へたり、汝ち知るべし、これ善導法然の意也、汝是れを知らずや、若し知らば淨土宗に居て淨土門を知らざる故に、無間墮すべし、若し是れを知り乍ら、利養の爲に彌陀の本願にそむき、善導法然の敎になき雜行雜修を事とし、一文不知の尼入道の無知の身に等しくして、唯一向に念佛する斗りなりと敎へたる宗風を、さまざま僞飾し、愚人を惑はし、利養を貪り、扨こそ彌陀釋迦の意に背き、宗風の敎を破りたる大罪なり、故に無間に墮するとは云なり、今の念佛者は口に數萬の念佛を唱と雖ども、心に念佛を信せず、故に萬善具足の念佛を不足にして、餘行を修し、稱へ易く行し易き名號を外にして、善導法然の敎に背き、斷食不臥などを成すもの、是れ苦

を以て經にそむき、師說に違す、墮地獄にあらずして何ぞやと、仰せられけるに、阿佛坊も口を閉ぢ、面色を失ひ、茫然せり、此時高祖首に掛けたる守の一封を出して、此を見せ玉ふに、此封六字の名號なりければ、阿佛坊はつと驚き、其故を問ふ、高祖曰く、善導法然念佛を信ずと雖ども、其性愚なる故に始より念佛を勸む、聖光親鸞等は是猶愚中の愚なる故、奧秘たる念佛を始めより勸めてこれを奧秘すること能はず、故にこれらの愚は取るに不足、吾宗は表に念佛を誹ると雖ども、心に深く念佛を尊む、故に無量の大善を具して現當の利益あり、是故に臨終には必ず正念にして、來迎を受け、安樂淨土に往生するなり、故に經に曰く於此命終して、即往生安樂國、彌陀佛大菩薩衆に圍繞せられ云々と、說き玉ふぞとの給ふ、阿佛房唯隨喜の涙にむせび、速に改宗して、法子と成れり、高祖御生涯中初對面にして、法門の奧儀を授與せられしものは、唯此一人なりと、御物語りあり』云々

世に阿佛房御書と名くる傳習錄樣の書あり、云く、『末法期に入て法華經を持つ男女の姿より外に寶塔なき也、若然者貴賤上下を擇ばず南無妙法蓮華經と唱者、我身寶塔にして、我身又多寶如來なり』と、今此念佛無間章に說ける所に依れば、日蓮は念佛其物を謗るに非ず、過まてる念佛宗徒を罵しれる也、却て念佛をば往生淨土の秘訣として採取したるが如し、是は百川が大海に入て鹹味となるが如く、萬法が法華界に入りて妙相となるが如く、阿彌陀も法華に入りて功德ある者となる也、猶神道の異神が法華に入りて妙法の守護神となるが如し、日蓮の網も亦恢々たる乎哉、

日蓮が禪宗を謗れるも亦只末派の增上慢を誅せる而已、請ふ邪禪天魔章に說く所を見よ、

『高祖曰世の中に、愚なる者多けれども、禪僧ほど愚なるものは又た是稀なり、彼が衆に尊む處の語錄と云もの、其拙なること小兒の寐語に似たり、一

として取るに足るものなし、恐なるかな中にも達摩惠可等は一つの取る處あれども、夫より以下は頑僧にして只彼獵師の袈裟を着するが如し、更に異ならず、一向に開示悟入を證とするとも闇路に徑路をたどるが如し、見性成佛などいへるは、猶木に緣て魚を求むるより難し、吁々不便なる哉、人間に生を受け乍ら、好で山林幽谷に入て獸の類に落入り、浮木の龜の一妙法に逢ひ乍ら、徒らに壁に向かつて、尻を腐らすこと、誠に知りぬ彼れが悟入と云は、猶深く迷へる也、彼輩の言に曰執着念を捨てざれば、見性成し難し、故に佛法僧共一に執す可らずと云へり、吁恐なる哉、夫れ禪宗と云ふ宗旨を建て、坐禪にのみ屈執する、早や已に邪禪に迷へるなり、彼の輩の云く教外別傳不立文字の宗旨なれば、經相には不依と云ひ乍ら、禪僧の恐錄に眼を肆し、釋迦何人ぞと、我何人ぞと自謾高謾を募り、いつか天魔に身入られ、如此邪路に迷ふ、是等の徒若邪執を離れて正しき心を以て、能く教相を學んこと暗夜に燈を得たるが如く、渡りに舟を得たるが如しと云へる處を覺悟せば、是ぞ眞の悟りを開きたりと云なり、然るを教外別傳と云立て、己が佛の本意を知らざることを秘し隱さん爲に、教相學者をいやしむ、吁是恐しき巧みなり、……世尊摩訶迦葉に告ての曰はく末法に至り經道滅盡の時邪禪盛んに弘まり、經相を外にして自迷ひ、是を悟とし、人をたぶらかすものあり、云々と說給へり、然ば今禪宗は唯をのれが宗旨に癖執して悟らんと思ふは、早いつか天魔を尊で道德者智識なんど云なり、是又天魔にすかされたるなり、又愚俗をたぶらかすと悟りたる證と云へり、是等は何ぞ悟の證とせんや、是等の小通を悟と云はゞ、狐狸こそ悟を開きたる也と云へし、是己に迷へる身ながらして、又人を迷はせば也、云々

事實若し果して此の如くなりとせば、日蓮の無礙方便天地と共に廣大にして殆んど窮極なきに似たり、英雄人を欺くとは嗚呼眞なる乎哉！　さるにても飜弄せられたる世人の愚かさよ、孺子をして名を成しめ了んぬ！

但し本章を終るに臨みて、余輩は法華と阿陀との勝劣を更

に評論するの必要を感じたれば、此に今暫らく讀者諸君の注意を本件に乞はんと欲す、深密傳には再三再四日蓮が心に念佛を服し、口に題目を唱へたる由を縷述す、而して此奇事につきては議論の紛々たる者あるは理の當に然るべき所なりとす、深密傳には、一見奇怪なるが如き一章（詠歌口傳章）を揚げて曰く、

『或時高祖御親族の方へ參らせれし御親諭に云、此度道善坊に助けられ參らせて、鎌倉に行き候也、露の身再會期し難く候程に秘極の事なれども、少々書き記し參らせ候、幷に此佛像は日蓮常に懐中に奉りし秘佛にて候えども、形身に參らせ候、他に不可許也、

あめつちにみつるほとなるたうとさはふかく心につゝみませ君

此歌の心は經にて御考へあらせ玉ふべく候、日蓮一大事の口傳にて候、經に深く心に念佛するものは成佛すること疑ひなし、但し假の名字は衆生を引導の方便なりと說き玉ひ候、是法華八卷二十八品の極意、經中第一の口傳にて候也、他宗の如く口に顯して念佛すれば全く無間地獄の業にて、經に深く心に念佛するものと疑玉ひて候えば、吾宗にては心の中に深く念佛するを本とすと、題目とは是念佛の假名なり、是を知りて稱へば題目に自ら念佛の利益こもるが故なり、假の名號なれども現當の利益疑ひなし、經に顯密の敎へあり、吾意密に口傳し候也、このことばかりにも人に語り玉ふまじく候、可秘々々、穴賢、此親諭は今小湊誕生寺にあるなり、因に記す、高祖五首の秘歌口傳

怠たらず假の御名をば唱ふべし、花よりこそは實ぞ結ぶなり、

是は深心念佛假名引導の心を讀玉へり、

天地に三つるほどなるたふとさは、深く心につゝみませ君、

親族のもとへ送り玉へる御消息に書き玉ふ六字名號の折句の歌に

身延山峰の阿彌陀は秘し佛け、ゆめ〳〵人に顯れな秘事、

奥の誦經堂を營み玉ひける御歌なり、今奥の院と云は是なり、

阿彌陀とは吾身延なる佛なり、餘所の佛へ人な詣でそ、

二十箇條無戒の中に乘せ玉ふ御歌

なにほどのむくひの罪はありとても身延へ參れたすけ玉ふぞ、

奥の堂の額にあげ玉ふ御歌なり、是亦六字折句なり、

右是れを五種の秘歌と申なり、他門に顯すべからず、吾門侶と雖ども、法門皆傳の以前は是を授くべからず、秘密、」

又法華名義章には云ふ

『高祖曰夫れ大乘無上の妙典妙法蓮華經は三世諸佛の秘密藏なり、故に是を信じ是を讀誦するものは終に成佛の緣となると云こと疑ひなし、是れ如來の金言也、抑法華と云名目は我門の所立秘密の深義を以て云ときは、法華とは即ち法の花なり、花は必ず遂に實を結び、實とは即これ眞實也、諺曰花は根に歸ると云は、法花は念佛に歸すると云義なり、故に世尊法華八軸の秘密方便門を開て眞實の相を示すとは說き玉ふ、經に曰心に念佛するを以てみな成佛すると云こと疑ひなし、十萬佛土の中唯一乘の法門のみ有て無二亦無三、云々××××××但し假名の字を以て衆生を引導す、唯一事のみ、一にして餘の二は即ち非眞と說き玉ふ、是我門所立の根本なり、一宗名義の出る所なり、又た深密の奥義なり、經に但假名字と說き給へり何を唱ふるとも心に口傳の名字を忘れざれば利益あれども、題は一部の總なるが故、南無妙法蓮華經と唱へしむるなり、此れを忽せに思ふべからず、又他宗に語べからず、未曾有の秘說希有最勝の唱號なり、吾宗秘極の相傳なり、たとひ一院の住僧たりとも、密旨の法門口傳の法器にあらずんば、敢て不可許なり、秘すべし〳〵』

以上の二章は多少誤聞誇張ありとすとも、日蓮自ら他に公言せり、『上根上機の者は觀心法も然る可し、下根下機の者は南無妙法蓮華經と唱ふ可し』と、又觀心抄に曰く、『不識一念三千者佛起大慈悲五字內裏此珠令懸末代幼稚頸』と、知る可し題目もまた、一種の方便なることを、勿論妙法蓮華經の五字

は八萬、寶藏十二部經を擣篋和合（壽量品の語）したれば、一たび之を口にすれば、一切經藏を悉く誦するに其功德匹敵すと云ふと雖ども、阿彌陀佛の稱號（所謂念佛）も亦廢すべからざる者なるとは、法華經其物の中に明記せられて存するを奈何せん乎、法華經の中には阿彌陀佛の事を擧げたる處大凡三點あり、化城品、藥王品及び普門品是なり、此中、化城品に於ては八方にそれぞれ佛陀あることを說ける際西方にも二佛あることを說ける者にして、其佛の名を一は阿彌陀といひ、一は度一切世間苦惱と曰ふ、原語に之をAmitayu（アミタユ）（に仝じ）及び Sarvalokadhâtûpadravodvegapratyuttirna と稱す、普門品に於は梵本には有れども支那譯には無し、但し觀音薩埵が阿彌陀の脇立たることを語れる者のみ、曰く『西方に得樂（スカーヴァ）國と名くる

淨土あり、其主阿彌陀婆蓮華の中なる寶座に居住す』、云々、藥王品には聞經の功德を說きつ、『女人たりとも此經典を聞かば、安樂世界（極樂）阿彌陀如來、住處に往きて、蓮華の中なる寶座の上に生れん』と明記せり、

扨既に此の如く法華經受持の信徒すら西方阿彌陀の淨土へ往生すと言はゞ、阿彌陀（無量壽佛の義）の名を唱ふるこそ最も自然の行路なるらめ、決して無間地獄へ墮つべき業に非ず、然れば日蓮が心に阿彌陀を服せしは甚だ信ずべき者なりけらし、如何となれば日蓮は佛經を悉く釋迦金口の所說と信じたるが故に、經文の明言を虛妄視すべき道理なければ也、然れば邪神邪佛章の如きは却つて信據すべき者と思はれずや、

『夫故に八宗九宗共に是無不思敎、皆無不邪敎、其中に吾宗獨り明かなること砂の中の金、星の中の月の如し、然れども各宗己れが信ずる所を以て尊しとするは思の至りなり、今吾宗は表に念佛を破して奥に彌陀を尊む、然れども彌陀經に依て稱すれば無上無邊の功德あり、然れども茲に口傳あり、名號の心を不知して稱すれば、無間地獄の業因となるなり、譬ば人參附子は良藥なりと雖ども、用ゆる方を知らざれば、服すれども却て害をなすが如し、六字の名號は三世諸佛の功德の寶なり、釋尊出世の眞懷たること は經文上に明かなれども、猥りに數を唱ふれば善しと思ふ故に邪法となる也、神明を拜するも亦同じ、天照八幡春日熊野等實に是れ外道の神なり、然るに吾宗門に勸請するときは變じて佛法守護の明神となるが如し、故に同佛と雖ども法華にあるを眞佛とし他宗にあるを邪佛と知るべし、神も亦然り、云々、』

是に由て觀きたるや、白隱禪師の道歌『ほこりたゝき』こそ滑稽の中に善く此問題を解釋したる者と謂べけん歟、少し長けれども左に揭げて讀者諸君の一粲に供せん、亦是れ好醒睡劑なるべし、

『歸命頂禮やれ〳〵皆さん聞てもくんないおらが親父の御釋迦と申は若い時から商ひすきにて親のゆづりの國も位もいらぬものだとさつぱりうちすて十九の年から山中へはいりて迦蘭阿羅羅の二人の仙人師道とたのみて菜つみ水くみたきゞをひろひて元手をこしらへ難行六年苦行六年十二年めに始て見せ出し花嚴と申せし結好なしろもの賣かけたれどもあんまり高ひで買てがござらぬ文殊と普賢と二人は買たが其餘の御客はさいふがかるさに耳も眼もつんぼのやうにてさつぱりかはねばこれではいかぬと分別しかひて鹿苑町へな宅替めされて阿含といふやうなやすものあつめて賣かけたればな買にも〳〵見せ先せわしく御客はあつまり得意はひろまる商ひ廣げて方等般若や法花や涅槃とお客の機を見てしろものあてがふ商ひ上手の親父のしうちに給孤獨なる須達

長者と申てどえらひ金持めつぼにほれこみ祇園精舍と名高いやしきをお釈迦にさし上萬や見せ出し阿彌陀を賣出す諸佛を賣出す釈迦も諸佛も御客のうちにて不可思議功德のよきもの買たとたがひにほめあひ商ひ繁昌得意も繁昌天上天下に一人の親父だ其時法花經の商ひさかりに龍女と申ておわかひ女中が法花經をかひうけとつくり呑込成佛なされたしかし此人文珠の化物智惠があるからさとりもひらけたわれらがかゝとはどえらひちがひだまた〳〵其時韋提希夫人と申せし女中は智惠も元手もさつぱりないのに阿闍世と申て不孝な御太子提婆達多と心を合せて親も佛もしまふてのけよと頻婆沙羅王牢屋へ入られうきめにあふたさそこで韋提は不業閻浮と此世をみかぎり智惠も元手もござらぬわたしが五障三從さわりの大病なほるお藥あるなら下され御頼申と御釈迦に向てはるかにたのめば御釈迦はがつてんおつとせうち〳〵五三の桐だよ其様なお客が大かたあらうと四十餘年のながの月日をおくらへ納めてたしなみおいたがさらば是から賣かけませうと法花經の商ひらく休みて阿難目蓮ふたりの手代をめしつれなされて王宮へ出現彌陀の本願他力の念佛五切兆載思惟の藥味をひとつに合て丸めた藥が六字の丸藥男も女も産前産後も差合ござらぬ智惠も元手もさつぱりいふない口にまかせて唱ふるばかりが他力の妙藥どうで其方は心相羸劣未得天眼智惠のないのも元手のないのも得とみぬいた是より外には用ゆる藥はさつぱりないぞとおすゝめなされた韋提はもとより五百侍女まで無始よりこのかたつもり〳〵し惡業煩惱さゝはりおほく三世の諸醫師もさぢをなげたる大病なりしが其場で驗益證得無生と平癒なされたなんとみなさんわれらが嗅らもゐだいけぶにんもおなじをなごだ六字の丸藥用てをります元手の入らぬが肝心要だ他力の念佛あんまりやすさにばゝかゝだましの見世しろものかとわれらちつくりうたがひおこりて何ぞ利口なしろものないかと智識にとふたら直指人心見性成佛御釈迦はみるよりにつこと笑ふて見たればお釈迦葉が莞爾とわらふて受とる是が本當の以心傳心さとりの眼をひらいて見たれば御釈迦は何もの我等

は何もの本來面目無一物だとおしやますからにはこりやまたどろらひほり出しものだと座禪をはじめてゆりかけますればしりはくさらで膝がぶりつくひざをなほせば眠がくるやらせなかをどやされ大きなめにあふこゝがなんでもしんぼう所と氣ばつて見たれば三年むかしに隣へかしたる黒豆三合思ひ出して妄念やま〳〵どうで我等が性にはあはない是ではいかない商賣かへましよ眞言秘密はどの樣なものだとたづねて見たれば阿字本不生でわれがむねには阿字が備はる羅字は差別とわかれて見れども阿字は大日金胎兩部も此むねひとつで父母の腹から生れたわれらが直に佛の位でごんすと聞よりそのまゝおんあぼきやべいをやりかけたれども元手も持ずに自力の商ひして見るやうなるばかほだらにて阿字やら羅字やらさつぱりしれねい近頃はやる妙法經力即身成佛是もけつ好な妙藥なれどもわれらが眼で法花經八卷よむ事叶はず題目おぼえて看板よむとも元手がないから代呂物かはれず四十餘年の未顯眞實なんの事だとたづねて見たれば法花經八軸廣い名號六字の名號法花經の略だと藥王品には法花經八軸呑こんだならば西方極樂あみだの淨土へ生れてゆくだと說てあるげな何もかんじやうだまはり〳〵て遠みち行より元手のいらない南無あみだ佛ですぐにゆくのがかんぢやうみちだよなんとみなさんそうでは無かえまんだあるぞえみなさんきゝない鼠の衣で夕飯くはずに二食でくらして戒行たもつは是も利口な商ひなれどもどふでわれらは蚤もころすが虱もころすぞ手をば出してぬすみはせねども心でぬすむは大きな事だぞ妾ももちたし嗅もなければ子種がなくなるうそはつかぬと口にはいへどもまさかの時にはちつくりうそをもつかねばならない酒は嫌いで呑ないけれども嫁入婚禮元服其外人にはのませにや世間が渡れぬ何と是では五戒も持たぬ是はなほさら買てがすけないみせのさびるがせかいのためだよこれがはやりて賣ひろげるならむすこも比丘さまむすめもあまさまむらやく町やく坊主あたまで田地もつくらずさかやもなければ比丘尼が子產んだためしもないからおしやうに嫁入の媒妁もあるまいそれでは世間に人種

なくなり人げん世界がつぶれてしまふぞとても我等に自力の商ひしようと思へば根氣と元手がなくては出來ないどうでも親父の敎にまかせて他力念佛六字の妙藥われらが病氣にてつきり合ますしかし元手が澤山あるなら自力の商ひなされてごろじろほそい元手で商ひ仕かけて棒がをれたら往す戻らず茶の木の畑でお迷ひなさるなむかし咄しを聞てもみなさえ諸宗の祖師たち智慧も元手も澤山あれども六字の丸藥おすてはなされぬましてわれらが智慧も根氣も元手もないから自力の足ない他力の御舟に乘るより外にはふんべつござらぬ凡夫が其儘佛になるとは石や瓦が不思議に變じて金となるのだ夫がうそなら御寺の和尚さんにたづねてごろじろ何とみなさんうれしいこんだぞ又も商ひならべて見しよならたんとあります儒道や神道や手島が賣出す心學なんどは店棚かざりて賣弘むれども商ひ敵でさま〳〵惡口おしやますけれどもわれが親父の商ひどゑらいもんだよ元は天竺夫から唐土日本へわたりて八宗九宗と商ひはんじやう賣出すしろものいやだといふたら日本にや居られぬ

上々樣まで御用ひなさるし夫が中にも織田の信長妙法蓮花のはたをなびかせ軍をなされて大方天下は治りたれども信心堅固の元手がないからやう〳〵一代明智の謀ほんにさつぱりしまつた申すも恐れていはれぬけれども

權現樣はな六字の丸藥軍の中でも御用ひなされた欣求淨土の御旗をおし立て天下をなびかせ四海を太平御代萬々歳とおつゞき遊ばす何とみなさん御存じあらうがうそではないぞえ是をみなさん手本になされて六字の丸藥家内へすゝめて朝晩絶さず用ひてごろじろ御家もむつましく子孫もはんじやう息災延命現當兩益是にまさりし御祈禱はないぞえ是みなわれらが味噌ではござらぬ本當の事だぞほういい〳〵』

第八章　政治家としての日蓮

今人は政治と宗教の分離を以て文明の徴證と爲す、固より今日に於ては此事眞なりとす、然れども是は只不完全なる社會に於ける權宜の方便なる而已、宗教と政事は元と一途に出で、相携へて併行せり、人間社會にして十分德に進み善に移りたらんには、政教また合して一とならん、如何となれば其時こそは政治は道德に適ひ、道德は宗教に適ひ、宗教は天意に適ふ者となるべければ也、宗教にして道德に離れ、道德にして政治に關はらずんば、孰れも人世を益する無けん、實に此等三者は鼎の三足たる也、

日蓮は法華經を以て宇宙無二唯一乘の妙典と爲したれば、之を用ひて啻に人々の靈魂を救はんと欲せし而已ならず、亦天下社會を改善せんと欲したり、是れ誠に良き精神にして、其の手段だに誤らずんば、必ず大いに觀るべきの功果ある可けん、此世界に用なき宗教は、亦彼の世界にも餘り用なからんとす、人を救ふは此世より始めざる可らず、

日蓮が世に鳴り始めたる時は恰も北條時賴の代に當れり、北條の執權は其筋目餘り正しからざりき、心ある者誰か之を感ぜざらんや、日蓮の穎才たる夙に之を辨まへてありき、上に引きたる小童大智章にも粗此の事は見えたり、當時天變地妖頻りにして、饑饉疫癘交も起りぬ、然るに、北條氏は世人が日蓮を攻擊するを制せざりし而已ならず、自らも亦日蓮を迫害し始めたり、日蓮の胸中豈平かならんや、日蓮思ふ

第八章　政治家としての日蓮

今人は政治と宗教の分離を以て文明の徴證と爲す、固より今日に於ては此事眞なりとす、然れども是は只不完全なる社會に於ける權宜の方便なる而已、宗教と政事は元と一途に出で、相携へて併行せり、人間社會にして十分德に進み善に移りたらんには、政教また合して一とならん、如何となれば其時こそは政治は道德に適ひ、道德は宗教に適ひ、宗教は天意に適ふ者となるべければ也、宗教にして道德に離れ、道德にして政治に關はらずんば、孰れも人世を益する無けん、實に此等三者は鼎の三足たる也、

日蓮は法華經を以て宇宙無二唯一乘の妙典と爲したれば、之を用ひて啻に人々の靈魂を救はんと欲せし而已ならず、亦天下社會を改善せんと欲したり、是れ誠に良き精神にして、其の手段だに誤らずんば、必ず大いに觀るべきの功果ある可けん、此世界に用なき宗教は、亦彼の世界にも餘り用なからんとす、人を救ふは此世より始めざる可らず、

日蓮が世に鳴り始めたる時は恰も北條時賴の代に當れり、北條の執權は其筋目餘り正しからざりき、心ある者誰か之を感ぜざらんや、日蓮の穎才たる夙に之を辨まへてありき、上に引きたる小童大智章にも粗此の事は見えたり、當時天變地妖頻りにして、饑饉疫癘交も起りぬ、然るに、北條氏は世人が日蓮を攻擊するを制せざりし而已ならず、自らも亦日蓮を迫害し始めたり、日蓮の胸中豈平かならんや、日蓮思ふ

らく、北條氏は啻に政治界に於て朝敵たるの嫌ある而已ならず、宗教界に於ては法華妙典の佛敵なり、若し勢ひ可ならんには、之を倒して日本全國を法華化すべし、併し乍ら北條氏といふとも若し吾が法華主義を採用したらんには、亦是れ吾が徒なれば、尙利導すべしと、是に於て乎立正安國論を草して、之を北條執權へ上つれり、正統史家小川氏は此事を左の如く書き綴りぬ、『時に文應元年庚申の七月十六日、高祖大士は奉行宿谷左衞門尉光則が邸に推參し、拙僧は御府内名越に住居なす日蓮といふ者にはべり、近來つゞく天地の變災、一代藏經の鏡にかけて、當世日本國をうつし見て書認たる、立正安國論といふ一卷の書なり、これいさゝか國恩に報い奉るのみ、願くは前執權時賴公の賢覽に備へ給れと、其書をさし出されければ、左衞門光則請取、頓て御所に出仕なし、此旨披露に及びたるに、將軍の御前において、北條一門をはじめ、列國の諸侍伺候し侍讀博士、比企大學三郎を召て、その書を讀しめ給ふに、その趣意に曰く、國は法に依て榮え法は人に依てたつ、近年うちつゞきたる、天變地妖は、末法應時の法華經、諸宗の惡義に利益あらはれず、其正法誹謗の罪深く、諸天善神は此國を捨て守らず、惡鬼國土に充滿するゆゑなり、金光明經には正法に背けば、其國に七難おこると見へたり、其七難の中、五難はこれまで顯れたれど、二難いまだ起らず、其二難とは、此國に軍起ると、異國より此國を攻るとの二なり、又藥師經の三災すでに二つ起りて、なほ一を殘す、兵革とて戰の災なり、若國王百官此法華經を御信用なく、いよ

〳〵念佛禪律等の御歸依ふかくば、此國の滅亡程近きにあらん、これ我が言にあらず、釋迦牟尼世尊、金口の佛說なり、とぞ書たりける、』

時賴等驚き呆れて愕然たりき、越えて廿四日時賴は日蓮を召喚して、其政事に容喙し、人心を蠱惑するを責めければ、日蓮ます〳〵强硬にして揚言すらく、若し臣が建言を排ぞけられなば、佛罰として自界叛逆難來り、御一門に內亂あるべく、又他國侵逼難起りて、外兵侵し逼る憂あるべしと、嗚呼何等の大氣焰ぞよ！

第二章及び第五章に說き及ぼせし如く、日蓮は兵法に意を注ぎ、他日天下を覆がへし、朝敵北條氏を倒さんものと考がへたりし如くなるが、哀しい哉其生れ卑賤にして、其志を達すべき望なかりしかば、斷然志を變じ、血脈を問はざる佛門に入りて宗教上より革新を天下に來たさんと計りぬ、深密傳敎誡王臣章に曰く、

『高祖或時仰せられ候き、我は是如來の使ひなり、故に梵天帝釋日月星辰等常に來て侍坐し給仕す、故に、天照八幡の小人も我前に來て低頭拜禮して、恭敬尊崇せり、然れども凡夫は、之を見るべからず、我は是日本の柱なり魂なり、若し我を輕蔑せば此國須臾も保持することを得じ、然るに今時の○○（字體不明故に○を置く以下同じ）將は皆是無眼無耳の蝗蟲なる故に、吾を尊重することを得ず、然れども徒らに默すべきにあらず、聊此意を含て開目安國論等を述作せしかども、心事十が一も顯さゞる也、今竊に眞の理を云はゞ○○將軍等は共に是れ叛

逆無道の大罪人なり、其故は如何となれば群多の小神を崇めて大乘の妙典法華を信ぜず、邪道を信じて此日蓮が眞說を貴まず、又衆民の刑を計ふ職に居乍ら、此日蓮を敵することを知らず、剩へ他宗を信ぜり、嗚呼其罪幾何ぞや、夫れ故に國の王となり將軍となり禪宗念佛眞言等の邪宗を信じて吾を崇めざらんものは、必ず天下を亡し國を失ひ、其身を失はんこと疑ひなし、如此の王臣は現世にては厄難を受く、當來には阿鼻地獄に墮せんこと、雨の空より降るが如し、是等の惡人を征伐して、妙法を崇むるを天下の善者と申なり、如是する人を梵天帝釋四天八大龍王等加護し給ふ事疑ひなきものなり、依て法華信者にあらざるものを或は殺し或は害するを諸天善人殊に喜び給ふなり、設令○○將軍と雖と法華を信ぜざるものは、天の助けなし、天の助けなきときは天の仇なり、』

彼が談話として又他處に傳へられたる者に曰く、

『高祖一時私しに御物語ありけるは、抑我國の愚民大元蒙古のみを父母の敵や、主君の敵の如く思ふは、淺間敷ことなり、是れ己れが賊たるを不知也、今我國を見るに三類の法敵盛んにして、君臣上下共に其邪敎を信じて、我正法を廢するに非ずや、故に國民自ら國法を恨むるもの不少、然れども國司等皆愚なるゆゑ是れを知ることなし、抑今將軍は元來是れ朝敵なり、且つは吾平民の怨敵なり、然れども時の威勢難折に依て、我等もこれに服從すると雖ども心中何ぞ喜ばしきや』云々、

勿論此一點たる、一國の政治に渉るが故に、誤解誣妄寃枉等は必ず其間に入りたらん、余輩は深密傳中にも此種の心事誤解多く挿入せられたる跡あるを視ざるに非ず、然れども大體に於ては、夫の朝敵及び佛敵たる北條家を倒さんと期したる者ならんも得て知る可らず、勿論、上にも暗示せる如く只野心を懷きて時の政府を覆がへさんと計りしには非ず、專ぱら正法（立正の文字に注意せよ）を以て國を安んじ（安國論の名を參看すべし）民を救はんとするに在りたれば、北條氏といへども、若し翻がへりて正法を護持する者とならば、必ずしも之を滅ぼすを欲せざりし也、

第九章　問題承前

元寇と日蓮

但し日蓮の安國論とは其性質何如なる者なりしや、古來僧徒にして臺閣に樞機を握り、一國の政務を總攬せる者少なからざりき、リシリウの如きウルゼイの如き、皆長く英國若くは佛國の政を掌さどれり、然し乍ら此等の人々は皆其政權を握れる間は、重に政治家として事を爲せり、布教家として運動せるに非ず、故に其特色として見るべき者は只普通政治家の品性にして、卽ち或は權謀術策家たりしか、或は直情徑行家たりしか、優柔不斷家たりしか、臨機應變家たりしか、擅制壓抑家たりしか、敏腕家たりしか、無能家たりしか等

と甄別するに止まる而已、然りと雖ども日蓮大士のは全く之に異なれり、日蓮は政治術に熟達せる所ありしに非ず、經國策に秀でたる所ありしに非ず、只法華經の勝妙殊絶なることを信じて、此の大日本全國を法華化せんと冀がひたる而已、而して其斯く日本を法華化するは卽ち頓て此邦を安んずる者と信ぜられき、是れ立正安國論の著はされたる所以なり、如何となれば立正とは邪法を除きて一に正法を立つるの義なれば也、而して安國（國家を安んずる事）の安國たるは卽ち此に存すと謂ふ可し、

勿論佛教にも一種の政治學は既に作り設けられてありき、王法政論經卽ち是なり、固より該經は虛托にして、釋迦金口の說に非ずと雖ども、已に唐代に於て支那に傳はりつ、大廣智不空師の翻譯する所となりたれば、其古くより西域に行なはれをりたらん者に似たり、而して是は全く普通經國術を表とし、佛教の主義を裏としたる政論にてありたり、卽ち該經の所說は實際の利害を本として、其中より一切を割出したる者のみ、決して日蓮の如く純理を極言したるに非ず、亦大いに印度の事情より立論したる所あるが如し、余輩は日蓮の政論と對照せんために、該政論經の大意を一瞥せんに、之を和解すれば、大凡左の如し、

「一時優塡王と稱する印度君主獨り閑居して思惟すらく、我今如何んせば、帝王の眞過失及び眞功德を學び知り得べきや、我若し知らば務めて其過失を避け、其德を修めんものをと、良久しく考がへて後、是の念を作すらく我が世

尊は實に三界の大師にして、一切智を具足したまへば、率往きて問まゐらせんと、乃ち詣りて問ひけるに、釋迦牟尼佛答へて曰く、今請ふ王之過失、王之功德、王衰損門及び王可愛法等を大王の爲に略說せん、大王當に知るべし帝王の過失なる者は略十種あり、若し是の如き過失を成さば、大府庫、大臣佐、大軍衆ありとも、歸仰す可らず、一には種姓不高、二には不得自在（進退受、禦肘）、三には立性暴惡、四には猛利憤發（暴怒刻罰）、五には恩惠賒薄（恩薄惠少）、六には受邪佞言、七には所作不順古先王制、八には不顧善法、九には不鑒是非勝之與劣（賞罰顚倒等）、十には一向縱蕩、專行放逸、此等十過失中、最初の一は是れ帝王の種姓（カスト）に關する過失とし、自餘の九は皆是れ自招の過失とす、＊＊＊＊又王可愛法とは帝王の愛す

可く樂む可く欣ぶべく意ふ可きの法を謂ふ、略五種あり、一には入所敬愛、二には自在增上、三には能摧怨敵、四には善攝養身、五には能修善事、是なり、最後に又帝王の須らく勤むべき者大凡五種あり、一に曰く恩養蒼生、二に曰く英勇具足、三に曰く善巧方便、四に曰く正受境界（時宜に隨ひて施給分布する等）、五に曰く勤修善法（佛法を勤修する事）、其內容略擧すれば大凡是の如し、該經は更に之を結ぶに例の利益談を以てす、云く——

『是故大王每日晨朝若讀誦此祕密王敎、依之修行、卽名聖王、卽名法王、諸佛菩薩天龍八部、日夜加持、恒常護念、能感世間風雨順時、兵甲休息、諸國朝貢、福祚無邊、國土安寧、壽命長遠、是故當獲一切利益現世安樂、爾時優塡王聞佛所說、踊躍歡

喜信受奉行』

有名なる王法政論は大體斯の如し、鳥尾得庵居士が往年著はしたる王法政論も全たく此の經に基づきて敷衍し來りし者とす、如何にも若此の如く信受奉行せば、必ず一切の利益獲らるべく、現世の安樂亦立つて俟つ可けん、如何となれば是れ印度に在りてや頗る健全なる治民法經世術なれば也、

日蓮大士の安國策は、日蓮の眼中に在てや、是よりも幾層高尚なる者なりき、日蓮は如上の政法類を以て悉く幼蒙時代の權宜方便と見做し、今は（上に說きたる如く）大乘弘布の圓熟期なればとて、直ちに天下國家を一躍妙法化せんと試みたり、是故に立正安國論に說ける所は一見甚だ不得要領なるが如き大乘一乘の敎理にてありき、日蓮思へらく、法華經は之を信ずれば無量無邊の功德あり、其かはり之を信ぜざれば其に相當する大罰重刑あるべしと、法華經其物にも再三此理を說ける而已ならず（上に粗舉示す）、又若人不信誹謗此經、其人命終墮阿鼻地獄などと斷言したれば、該經を金科玉條と心得たる日蓮の眼中には當時續發せる天災地殃は全く法華罰と見えたらんも眞に得て知る可らず、宜なる哉正統法史家小川氏が立正安國論述作の動機を其頃の災殃に尋ね得たること、小川氏曰く——

『されば建長康元もきのふと暮、今年正嘉元年丁巳の春にいたり、四季の氣候不順にて四月の月蝕五月の日蝕、ともに恒ならず、同十八日海の潮泥に變じたる、こはいかにと

思ふうちに、その夜子の刻、大地震、そのうへ三月より此方雨一滴もふらず、田畠涸乾きて野に一莖の青草だになし、六月加賀法印、雨乞七月鶴が岡の僧正も雨乞ありけれども、一切に驗なく、大地燒焦れて、人間さへ命つぐべしともおもはれずありけるに、八月朔日より地震ゆりはじめ、同廿三日夜の戌時、地震のありさま、地底しばらく鳴動するよと見えしが、大地を搖揚たる事大凡二丈ばかり、大名小名堂塔伽藍の差別なく、其外町家農民の住居、海郎の磯舍にいたるまで、瞬間に微塵となり、人畜ともに大半これが爲に命を喪ひ、たま〳〵免れたる人も、傷つかざるは稀なりけり、其山岳の鳴どよむこゑすさまじく、大地は三尺五尺ひび破れて、泥水を吹出し、又青き火焔、十丈二十丈所々より長空に立登り、それより百日ばかりの間、震動止ず、又十月十三日、一天俄に五色の雲を搔乱す、又いかなる憂目をや見るらんと思ふうち、鋒の如き電光八方に散亂し、人の眼を貫ぬくばかり、しばし〳〵て大雷鳴はためき、襖扉障子をうち外す、又同十五日にも大雷地震おりかさなり、打つゞく凶變は東鑑に載て詳かなり、こゝにはその大略を述るのみ、かゝれば鎌倉をはじめ、關東廿八ヶ國、農民は鋤鍬を取らず、漁者は網を曳にしよしなく、米穀諸色賣買の道絶果て、よし天災を免れたるも、餓死者ぞ多かりける、日蓮大士此ありさまを見そなはして、あまたゝび歎息し、近年の凶變、別て今年の有樣は、時運にもあらず、天災にもあらず、全く、法華經流布の時節なるを、念佛眞言の諸宗門その大法

の妨なすを天怒り地罰し給ふに疑あらじ、此事は房州清澄、南都の藥師寺、下總土橋東漸寺、鎌倉鶴が岡と四度まで、一切經藏に入てこれを考へ置たり、今一度藏經を開て、證據となるべき諸經の要文を撰ばんと、正嘉二年正月六日、鎌倉を立て、駿州岩本實相寺の經藏に赴きたまふ、＊＊＊〔然るに此春の末つ方高祖の慈父逝去ありし由房州より告げ來りしかば、慟哭おかず〕頓て高祖大士は、旅裝をとゝのへ給ひ、日朗師を將て房州小湊におもむき、慈母を慰めつ、樒の青葉摘とりて、そゝぐ涙を手向種、御經讀誦いと懇に百ヶ日の佛事はてゝ、鎌倉にかへり給ひけり、いづくも打つゞく變災に、人の心も弱りはて、年々五穀登らずして、淺ましき事のみ多かるに、今年八月朔日颶風洪水にて、非命に死するもの數をしらず、おなじ其廿八日の夜は熒惑といふ惡星いでゝ、一天の星みな光を奪はれ、しかのみならず、狂星長さ八丈ばかりなるが、乾より巽の方へ飛わたる、そのひゞき山岳に鳴轟く、これより諸國大飢饉、そのうへ疫病流行し、萬民なげきの中に今年も暮て、明れば正元元年の春、歳あらたまれども壽き祝ふ聲もなく、國中民の食盡て、そのうへ疫病いよ〳〵烈しく、いさゝかも手脚の協ふ者は、病煩らひながらも、笊を提げ、鎌を腰にして、野山をさまよひあるき、木の皮草の根をせゝり、それを咬ながら倒れ死するも多かりき、また歩行協はず家に居者は、飢に苦み病に惱み、泣き呻く、親子兄弟夫婦の間に聊かの喰物を得れば、互にゆづりあひ、其大切とおもひ、最愛と思ふ

人に先すゝめて、喫しむるゆゑに、情ふかく實ある者は、其家のうちにも人よりはやく命を喪ひける、荏原義宗、名越の御庵室に來り、高祖大士に物語やう、けふしも村岡の邊りに通行かゝり、咽喉の乾きたるまゝ水を一杓貰はばやと、或る農家に立入たるに主翁とおぼしき五十ばかりの男、壁に倚かゝりいと惱ましげに見へければ、流行の病に苦しみはべるやと問ば、頭をうち振て、九旬このかた食料はつきはて、糠に藁に咲つくし、壁土をさへ口に含み、今は食たえ廿日あまり、妻はその菰莚の下に死てあり、土間の曲竈の下には弟の死骸もあり、その亡骸をさへ取歛むべきすべなしと、涙を拭ふ袂さへ、手を揚かねし蟲の氣息、納戸のかたをさし覗けば、何やらん古葛籠のうちに、搔むしる物音するにぞ、あれは何ぞと尋れば、されば、とよ五歳と七歳となる男子二人有て、妻は其をいたはるとて、己れは喰ず二人の兒等にのみあたへつゝ、それゆゑ早く死したりき、五七日このかたは、二人の兒童も聲泣嗄し、慈母は何處へおはしたるぞ、爺さま早く物喰して給ひねと、此世からなる餓鬼道の飢にくるしみたへかねてや、兄弟たがひに掴合頰先手脚に食つきて、血しほに染る有さまの、眼も當られぬ振舞を、今は見兼て兄の方を櫃に入、弟を古葛籠に入れ、見給ふ如く繩もてからげおきたるは、千代とも祈る我が子さへ、早く死ねかしと願ふのみと涕をすゝりて物がたるを、聞てあはれさやるかたなく、腰につけたる一袋の乾飯をとりいだし、彼の主翁にあたへたるに、主翁は

これを押戴、御志はうれしけれど、とても生ながらふべき親子が命ならぬを、今なまじひに食物を得て、一時なりとも生延なば、又一時の憂目や見ん、許し給へとさし戻しぬ、さて恐ろしき事かなと、歸る途中の噂にも、いつぞやより京都に人を啖ふこと始まりて、新に葬りし墓を發き、又往倒れたる人の肉を食ふよし、此頃鎌倉にも移り來て、昨夕巨袋坂の墓所にて死人を啖ひ居たる者ありと、取々人の語りはべるとありければ、日蓮大士も、共に哀れを催して、御法衣の袖を絞り給ひ、されば末法法華經の弘まらせ給ふべき時節なるを、諸宗の邪義に障られて正法の立ざるを天怒り地罰し給ふなり、いでや此事譯を鎌倉殿に訴上ん、上一人此事を辨へ給ふ程ならば、下萬民の幸ならんと一卷の書をつゞり給ひ、正法を立て國を安くする義を取て、これを立正安國論と名けられしが、兼て前年京都にて圖らず面會ありし比企大學三郎能本の近頃鎌倉に召下されありて、儒道に天文を兼て、御所に昵近しをり、大士とは師檀の契淺からざりければ、幸ひ彼の安國論を大學三郎に見せて、文章の連續や文字の誤過をしらべさせ給ひけり、例せば天台には徐陵あり、妙樂には梁肅あり、傳敎には眞綱ありて、皆其時の碩儒佛法を扶翼たり、今高祖大士に能本ありて、此安國論を校正しけるも、みなこれ三寶諸天の所爲とぞ知られける、』

意ふに此點に於ては日蓮の精神必ず飽までも眞摯なりしなる可し、法華經所約の賞罰を文字通りに確信する者は、勢

ひ眞摯ならざるを得じ、決して世を瞞着せんと計りし者とは謂ふ可らざる也、只其斯る『天怒地罰』を和め救ふ方法に於て日蓮は空想家の如く極端に奔りし而已、佛教には、上に引ける如く、王法政論なる者ありて、王者の治道を敎ふる叮嚀なりと雖ども、日蓮は此等の所謂る『過失』および『功德』を肯て北條時賴の前に講演せんとは務めず、直ちに一念三千、凡聖一如的妙法——今日の語を以てせば一種の高遠なる宇宙觀とも稱すべき者——を執權の面前に縷陳したり、是を以て流石の老猾なる時賴も餘りの大主張に喫驚し、呆然として之が處分に惑ひたりしと見ゆ、實に日蓮の確信と時賴の驚愕とは逆比例の觀をなして有りき、日蓮をして言はしめば、是れ全く鈍根邪見の結果ならく而已、故に日蓮は時賴に召されて其僭越を詰らるゝや、敢然と言ひ開きして、自ら其嘲を解き、且語を續ぎて曰く、將軍若し愚僧の言を容れたまはずんば、佛喝の如く、必ず內亂外寇あらんと、時賴は愈よ憤れり、各宗は益す怒れり（如何となれば法華以外の諸宗を斷然廢絕せよと北條氏に日蓮逼りたれば也）、暴徒は松葉ヶ谷を襲へり、日蓮は伊豆の伊東へ流さる、諸宗更に讒訴して、日蓮は死罪に極まりぬ、減刑の後佐渡の島へ遠竄せられたり、日蓮は謂へらく、是れ夜光の珠を暗中に投じたるが爲のみと、聖書の語を以て言へば、是れ眞珠を犬に投げ與へたる結果なりけらし、但し聊か中途に溯りて言はんに、法華不信仰の天罰と日蓮が唱へたりし他國侵逼難をして功驗あらしめんとてか、文永五年元國（蒙古）の使節は我が國に來りぬ、該使節は固より逐還されしかども、後の祟を

怖れて、人心は恟々たること、恰もナポレオンに脅かされたる英國の如くにてありき、是に於て乎日蓮は先づ一書を奉行宿谷光則に呈しけるに、報ぜざりしかば、更に又北條時宗（今は時頼已に死してありければ）を諫めんとて、一封を裁し、大に法華奉戴信受の必要を論じたりとぞ、正統史家小川氏之れを記して曰く、——

『此時に當て、日蓮大士、書通を認て、奉行宿谷左衞門尉光則に献げていふ、抑々正嘉の大地震、文永の大彗星、飢饉また疫癘、日蓮これを御經に勘へたるに、念佛禪宗等、正法の法華を邪魔なすゆゑに、此災を招けり、もし我が諫を用ひ給はずば、他國侵逼難とて、異國より此國を犯すべきよし、去る文應庚申の七月、一卷の書を公の御手を以て御舘に奉れり、しかしてより此方既に九ケ年、今年大元蒙古より使を此國に來らしむること、我が先言に符合し終れり、この異國の敵を招く者は念佛等の諸宗なり、又此外敵を退治するものは、唯日蓮一人なり、國の爲、法のため、いさゝかこれを言上すとぞ書たりける、奉行光則、有無の返答なし、これに依て其年十一月十一日、又一通を書て執權北條時宗にたてまつる、天下の安危存亡は、法の權實邪正に依こと、前年安國論に述たるが如し、願くは當時諸宗の學者知識を殘りなく、問注所に召れ、此の日蓮と掛合せ、御前において彼の宗々と、我が義と公正明白に聞召譯られ、其邪惡の宗を捨て、此純圓一實の御經を御歸依あらば、此國の安泰ならん事、掌を返すよりも速ならん、國を治め天下を平和

にするの根本は、この一擧の宗論にありとぞしるしける、そのほか平左衞門頼綱、北條彌源太、極樂寺の良觀建長寺の道隆、大佛殿の別頭隆觀、淨光明寺の行敏、壽福寺、多寶寺長樂寺等へ以上合せ十一通の書をつかはして其邪義を責しかば、此寺々はいづれも御由緒ありて輕からぬ寺門なれば、其日蓮の書に添書して、各々訴上るにぞ、上下萬人これを傳へ、喋々しくも罵りける、爰に先年北條義時蝦夷の備として安藤五郎をつかはして奥州津輕に砦を構へてありけるが、此秋蝦夷謀反を企て、東國に亂入し、安藤五郎これがために討死して、砦さへ燒うたれたるよし鎌倉に注進す、大士これを聞たまひ、法弟檀越に宣ふやう、哀れなるかな、我が日本國、蒙古西に動き、蝦夷東に叛き、國に種々の變災起る、此の災難の根を知る者は絶てなし、反て法華經の行者を責惱ますゆゑ、愈々國に災を襲ぬるを知らず、今に見よ〳〵諸宗の讒言を信じ、此日蓮を捕へて、又々流罪死罪におよぶべし、我弟子檀那と名乘ん者は心に臆し思はるべからず、妻子を思ふことなかれ、權威に畏るゝことなかれ、命惜さに法華經を捨たりとも、終に蒙古の爲にうち殺さるべし、迚も協はぬ身なりせば、一乘法華の爲に骨身を碎き、此生死のきづなを切て、佛果を得らるべしと、進退きはまる世のありさまを涙ながらに語り給ふ、』

果然日蓮は佐渡へぞ遠く流されける、佐渡に在るや各宗の僧徒來りて屢々法論したりしかども、孰れか日蓮の博學才辯にかなふべき、皆語つまりて引き下がりぬ、是に於て土地

の有力者地頭本間六郎重連（第五章参看）も早く既に日蓮に心を傾むけてありき、茲に一二の注目すべき話は正統史上に光彩を放てり、小川氏の之を傳ふること左の如し、

或る時法論終りて、陪聽者たる本間氏も辭し去らんとせしに『高祖暫しと呼とゞめ御身はなどて鎌倉へ往きたまはぬぞ、北條殿わが詞を用ひ給まねば、今は彼の地に合戰の始まりつらんと宣へば、重連きゝあへず、聖人何をのたまふぞ、いま天下は無事にして、弓は袋に太刀は鞘、何を當處に箭をあげんと、いひ捨て立歸りけり、廿三日申の刻ごろ、日輪ふたつ並出たりとて、島中立騷で見物し、いかなる事の前表ならんと語るうち、二月十八日早船來て、京都に戰あり、又鎌倉にも軍ありとの注進なり、本間重連あはて愕き、塚原にまゐり、大士の前に胡跪き、先月十六日の御詞、いかにやと疑ひ奉りしに、今三十日にして符合せり、されば大蒙古の寄來ると宣ふも相違はあらじ、念佛無間も一定なるべし、今日よりは聖人の檀家と成して給はれと合掌す、大士宣ふやう、我はかひなき凡僧なれども、法華經を弘むれば、釋尊の御使なり、梵天帝釋も我が左右に事へ、日天月天も我が前後を守り、天照八幡も頭を垂て我を敬ふべし、然るを上下萬人これを惡んで、失はんとするは唯事とも思はれず、譬へば病ひに正氣を失ひ、その親をも罵うつが如し、委しくは立正安國論にしるして、鎌倉殿の御覽にさし上置たり、合戰の間や虧ん、疾ゆき給へとありければ、重連慇に暇を告げ、一族郎等引具して、太刀よ鎧とひしめきつ、其夜船を飛して、鎌倉へ走去けり、さても宗

祖大士は、去年十二月より、此北海の雪の中に凍て死るならば、一の不測を言殘さんと、氷りし筆を呵にあたゝめ、書綴り給ふやう、日蓮は日本國の柱なり魄なり、柱倒るれば家傾き、魂去ば人斃る、日蓮こゝに在て此經を持てばこそ、此國しば し安穩なるに似たり、日蓮去る時は七難競起て、日本國必定喪ふべし、此書は釋迦多寶十方の諸佛、當世の日本國をうつし給へる明鏡なればかたみとも見るべしと、一切衆生の盲目をひらく大慈大悲をもつて開目抄と名づけ、鎌倉の弟子檀越へ贈り給ひける、此頃××、×× 鎌倉より日興上人と熊王四郎兩人來て、大聖人の恙なきを喜び、たがひに手を取て泣給ひけり、大士鎌倉の樣子いかにと尋給ふに、されば近年北條長時の次男、治部大輔義宗、京都に登りて、六波羅の北に居、又式部太輔時輔は南に居、これを兩六波羅とて、畿内西國の政事を取扱ひ、京鎌倉の間、飛脚日夜に往來し、四國九州二島の沙汰、居ながらにして鎌倉に聞へ、關の東西よく治り、諸民心易くありける、しかるに南六波羅、式部時輔は、最明寺殿の嫡子にて、執權時宗の兄なりければ、我もと鎌倉に在て、執權となるべき身を舍弟の時宗に其職を奪れ、かへすがへすも口惜しとて、ひそかに謀叛を企てけるに、其隱謀はやくも露顯に及び、鎌倉より早馬を以て北六波羅、北條義宗に下知を傳へ時しも二月十一日、義宗軍兵を卒し、不意に發て南の敵に責かゝる、京洛中上を下への大亂となり、式部時輔あへなく討れ、家門一族數を盡して討死せり、公家にも中御門左中將實隆卿はこれに與したりとて、押籠られたりと聞く、又十